



TAMBA Mirai Project 「丹波からTAMBAへ」

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）



2020年度（令和2年度）
活動報告集

兵庫県立柏原高等学校

【巻頭言】「探究」から「丹BAL」へ

兵庫県立柏原高等学校長 井上 千早彦

全国が、いや全世界が新型コロナウイルスに翻弄された 2020 年でした。そして 2021 年を迎えましたが、いまだ収束の兆しは見え、兵庫県は 2 回目の緊急事態宣言が出されました。「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の 1 年目の最終段階に入り、最後のまとめに向かっていたのが今年の今頃でした。以来、海外との相互に訪問しての交流は、すべてキャンセルとなり、2 か月の学校休業も重なり、大幅な事業計画の変更を余儀なくされました。他校におかれても状況は同様だと思われます。そんな中で、できることを見つけ出し、工夫しながら取り組んでいくしかありませんでした。生徒たちは、時間のない中で積極的に取り組み、私の想像以上に成長してくれたように思っています。本冊子にて、本校の実践を報告させていただきます。指定 2 年目でありながらまだまだ十分なことはできておりませんが、この報告をご覧いただき、是非、ご助言、ご指導いただければ大変うれしく思います。よろしく願いいたします。

本校では、もともと「知の探究コース」の「総合的な学習の時間」に変えて「探究 I および II」を設置し、探究活動に取り組んできましたが、それをすべてのクラスに広めていきたいと考えました。そのために、教員研修を実施し、育てたい生徒像について議論し、その目標を明確にするとともに、「総合的な探究の時間」の名称を、「総合」や「探究」などの一般的な呼び方ではなく、我々の思いを込めた名称に変えることにしました。それが「丹BAL」です。ご想像の通り「丹波」と「GLOBAL」を合わせたものですが、それだけではありません。その他、丹波から「Be A Leader」など様々な思いを込めてこの名称にしました。これからの社会に必要な力、正解のない課題に対して協働しながら最善解を導きだせる力を育成するため、探究活動を通じて、「聴く・読む力」「考える力」「伝える力」「発表する力」などの力をつけることを目指しています。

詳しい内容は、本冊子をご覧いただくとして、コロナ禍で様々なことが制限を受けたとはいえ、オンラインでの海外交流やインタビュー、会議など、これまでできていなかったことが、できるようになったというメリットもありました。一方で、様々なフォーラムなどがほぼ Web 開催になり、対面でしか得られない成長の機会が失われたことも事実です。今後も、知恵を出し合い工夫しながら、生徒の活動や成長を止めないよう取り組みたいと思います。

指定期間はあと 1 年ですが、以降も継続していくことが最も大切です。兵庫県でも生徒の減少が続き、中山間部にある学校の在り方や果たすべき使命が大きな課題となっています。本校の取組が一つのヒントになれば、こんなにうれしいことはありません。

最後に、文部科学省、兵庫県教育委員会、丹波市をはじめこの事業にかかわってご指導いただいたすべての皆様に、心から感謝いたしますとともに、今後も、引き続きご協力、ご助言賜りますようお願い申し上げます。

【巻頭言】「TAMBA Mirai Project 丹波から TAMBA へ」に期待すること

関西学院大学フェロー 高畑 由起夫

ご存じのように“グローバル”とは、“グローバル”（地球規模）と“ローカル”（地域）を掛け合わせた言葉ですが、それを象徴するのが“Think globally, act locally”（地球規模で考えて、地域の視点で行動する）というキャッチフレーズです。それでは、丹波／TAMBAの地でどんなことに気づき、どんな行動ができるのか？ 何より、この言葉が生徒の皆さんにどのような成長をもたらすのか、いま日本の教育が問われています。

まず、ここ数年、柏原高校で生徒さんの探究学習に接していると、そこに多くの気づきがありました。例えば、いつの間にか身の周りに増えた外国籍の人たち。その多くは技能実習生の方々ですが、彼らがスムーズに日本語に接することができるように支援するにはどうすればよいかを考えた時、それは自らの日本語を見つめ直すきっかけにもつながります。それが例えば、“やさしい日本語”です。外国人の方に母語でコミュニケーションできれば理想的ですが、それは難しい。とすれば、わかりやすい簡単な日本語を工夫した方が良いでしょう。さらにそれが日本語の表現を改善していくことにも、あるいは外国語への理解を増すことにもなっています。

あるいは“丹波竜”を世界に発信する！ それは世界から“TAMBA”が見つめられるということです。今や、Webで世界の情報を簡単に得ることができますが、それは逆に、世界から見つめられていることでもある。一方で、様々な情報を発信しても、世界の関心を得ることができなかつたら、それは評価されなかったことになる。それを乗り越えるためには、独りよがりの発信にとどまらないように、“グローバル・スタンダード”を意識しなければなりません。

私の専門の一つは人類学ですが、それは「他者と会う」ことで「自分自身を見つめ直す」という性格を持っています。とすれば、ここ丹波の地から世界に発信することで、世界のなかのTAMBAを見つける。それがまたさらなる発信につながって、いつの間にか自分自身が変わっていく。こうした新しい学びの世界が期待されます。

一方で、グローバルな教育は高校と地元の連携を育むはずですが。私はこれまで国内外でいくつかのフィールド調査を体験しましたが、土地の人たちにとって、その地の魅力はあまりにも当たり前のこととして、ことさらに意識していないケースが珍しくありません。むしろいったん故郷を離れたり、あるいは他所からやってきた人たちがあらためてその魅力を発見し、地方創成に志す。よく“よそ者、若者、ばか者”が地域再生には欠かせないと言われていることです。しかし、これは別によそ者でなくてもかまわない。よそ者の眼＝グローバルな視点で自ら＝ローカルを見直すことが大事なのです。グローバルな教育がそのきっかけになれば、これは大きな社会貢献と言えるかもしれません。

残念ながら、昨年から続くコロナウィルスで、今は、生徒さんが自ら“よそ者”としてフィールド・海外経験を持つチャンスが減ってしまいました。しかし、Webを通じても他の世界を知ることができる。それは逆に、世界の関心をTAMBAに引き寄せることも可能です。こうした教育経験は、入試等の当座の役にはたたないと思われるかもしれませんが（もちろん、英語やIT等の学びに直結しますが）。しかし、長い目で見れば、

卒業後の大学での学びや、さらに社会に出た後の仕事等の中で役に立つはずでず。ぜひ、新しい勉強の形を追求していただきたいと期待する次第です。

目次

【巻頭言】 兵庫県立柏原高等学校長 井上 千早彦

【巻頭言】 関西学院大学フェロー 高畑 由起夫

1	研究開発実施状況報告	1
2	活動実績一覧	11
3	丹 BALI 「丹波の魅力をおすそ分け」	21
4	丹 BAL 台湾	27
5	探究Ⅱ	35
6	総合Ⅲ	43
7	学校設定科目「グローバル」	46
8	オンライン交流	51
9	視察等	55
10	第5回「地域課題から世界を考える日」	60
11	生徒作品	65
12	生徒意識調査	82
13	研究推進部通信「K★ing」	89
14	新聞記事	93

TAMBA Mirai Project 丹波からTAMBAへ

～グローバルな視点で丹波の課題解決に主体的に取り組むグローバルリーダーの育成～

兵庫県立柏原高等学校

SDGs のテーマに関連する地域課題を海外の学校を含めたコンソーシアムで共同研究

○高年齢化、人口減少・流出への対策

○豊かな自然環境との共存、有効活用

雇用促進、地域医療の充実、定住・移住促進 等

防災対策、里山、丹波竜を生かしたグリーンツーリズム 等

SGHアソシエイト校(H26～)

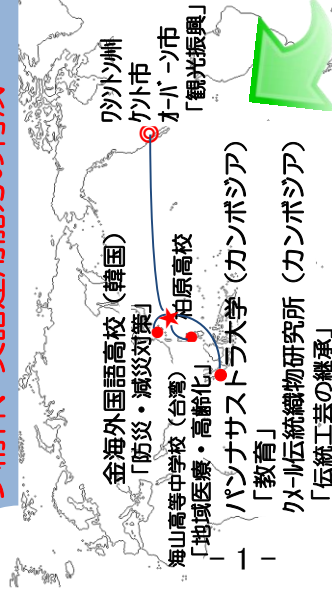
ひょうごスパーハイスクール(H30～)

グローバル

世界の人々との協働に必要な国際的視野、チャレンジ精神、英語運用能力の育成

ローカル

地域の活性化や課題解決に必要な地域理解力、発案力、実践力の育成



地域活性化策の提案

○地域に関する課題を見つめ、解決策を研究
地域を知り、課題を見つめ、解決策を研究

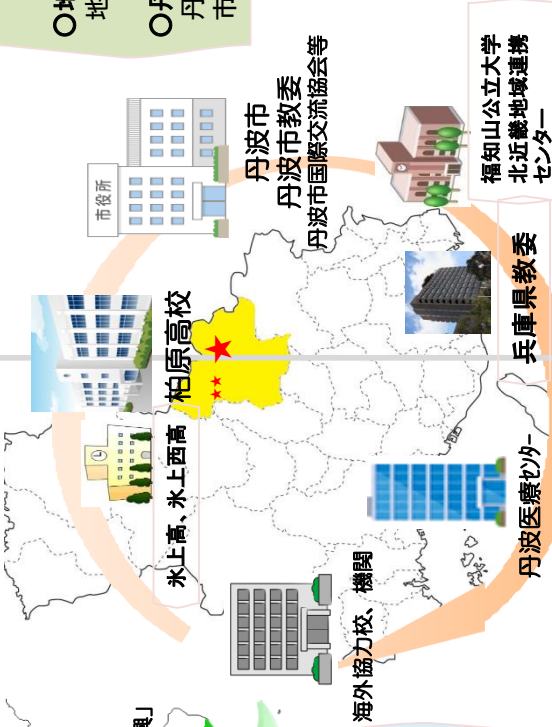
○丹波市議会☆ミライプロジェクト
丹波市内の2つの高校と共同で地域活性化策を市議会に提案

海外の教育機関との共同研究

- テレビ会議等の活用
- 現地への訪問、フィールドワーク
- 「グローバル・サミット(仮称)」の開催
海外連携校をテレビ会議で結び、研究成果を共有、共同提案書等の作成
- 国際機関等への提言 例) 医療問題→WHO

高度な英語運用能力の育成

- ICTを活用した英語教育
タブレット端末の活用による発信力の育成
- 丹波イングリッシュキャンプ
中学生を招いた英語漬けの合宿



「地域課題から世界を考える日」の開催

- コンソーシアムに加え、地域住民、在住外国人も招いて、研究成果を発表
- 丹波を通して、地球規模の課題について共に考える

在住外国人との共生

- 英語でしゃべらんず
在住外国人を昼休みに招き、英語で交流
- 外国人から見た地域課題の検証
外国人も住みやすい町づくりの研究

地域を支えるキャリア教育

- ローカルキャリア教員養成セミナー
- 地域医療系人材養成プログラム
- 地域公務員養成プログラム
- 起業マインド養成プログラム

丹波の課題＝世界の課題 と捉え、「ローカル」×「グローバル」な視点で課題研究
協働の中で培われる課題解決力でTAMBAを支えるリーダー育成

1 研究開発実施状況報告

1 研究開発名

TAMBA Mirai Project 丹波から TAMBA へ

～グローバルな視点で丹波の地域課題解決に主体的に取り組むグローバルリーダーの育成～

2 研究開発概要

地域が抱える課題と世界が抱える課題との共通点を見だし、SDGs（持続可能な開発目標）に関連するテーマについて、地域の自治体や関係機関に加え、海外の教育機関も含めたコンソーシアムを構築し、グローバルな視点で共同研究を行うことで、地域と世界をつなぐ柔軟な発想を持ち、立場や文化、背景の異なる人々とも協働しながら実践的に学び、地域資源を生かした課題解決について提案し、地域や世界の未来を創造できるグローバル人材の育成をめざす。

育成すべき具体的な資質・能力として、①地域の魅力と課題を理解し、活性化や課題解決に積極的に関わろうとする姿勢、②世界と地域を結び付けた広い視野から地域課題を解決しようとする柔軟な発想力、③価値観や文化の異なる人たちと協働しながら課題解決に取り組む実践力等を培うことで、将来グローバルな視点で地域を創造することのできるリーダーを育成できると考える。

3 管理機関の取組・支援実績

(1) コンソーシアムについて

①コンソーシアムの構成団体

機関名	機関の代表者名
丹波市	市長 谷口 進一（令和2年12月4日まで） 林 時彦（令和2年12月5日から）
丹波市教育委員会	教育長 岸田 隆博
丹波市国際交流協会	会長 山口 直樹
丹波市商工会議所	会頭 大地 但
丹波市観光協会	会長 柳川 拓三
丹波医療センター	院長 秋田 穂束
福知山公立大学北近畿地域連携機構	市民学習部長 杉岡 秀紀
ワシントン州 ケント市	市長 ダーナ・ラルフ
ワシントン州 オーバーン市	市長 ナンシー・バッカス
兵庫県教育委員会	高校教育課長 西田 利也

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年7月8日	今年度の事業打合せ
令和2年7月15日	課題研究中間報告会

	・課題研究の内容と進捗状況について確認
令和2年9月30日	課題研究中間報告会 ・課題研究の内容と進捗状況について確認
令和2年12月2日	課題研究中間報告会 ・課題研究の内容と進捗状況について確認
令和2年12月22日	学年発表会 ・課題研究の内容と進捗状況について確認
令和3年1月7日	丹波市と、本事業の今後の方向性について打合せ
令和3年1月29日	「地域課題から世界を考える日」 ・課題研究の成果と今後の課題確認

(2) カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習実施支援員

①指定した人材・高等学校における位置付けについて

分類	氏名	所属・職
海外交流アドバイザー	松岡 秀司	カンボジア パンナサストラ大学教授
地域協働学習実施支援員	鴻谷 佳彦	NPO 法人 gift 理事

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
松岡 秀司 年間を通じてメール、電話 等で随時	・オンラインで、運営指導委員会に参加 ・事業における活動について協議 ・カンボジアの学生との交流について打合せ
鴻谷 佳彦 年間を通じて	・1年生探究授業の講師として、生徒の活動の支援 ・事業における活動について打合せ

(3) 運営指導委員会について

①運営指導委員会の構成員

氏名	所属・職	備考
中瀬 勲	兵庫県立人と自然の博物館 館長	学識経験者
高畑 由起夫	関西学院大学 フェロー	学校教育に専門的知識を有する者
杉岡 秀紀	福知山公立大学 准教授	学校教育に専門的知識を有する者
柳川 拓三	丹波市観光協会 会長	関係機関の責任者
Rooks Matthew John	神戸大学 准教授	学校教育に専門的知識を有する者
荻野 雅文	丹波市企画総務部総合政策課 政策係長	関係行政機関の職員
松岡 克晋	兵庫県教育委員会事務局 高校教育課 主任指導主事	関係行政機関の職員

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
------	------

令和2年8月18日	第1回会合 ・今年度の事業方針 ・今年度の活動状況及び活動計画
令和3年1月29日	「地域課題から世界を考える日」 ・課題研究の成果と今後の課題確認
	第2回会合 ・今年度の活動状況について ・来年度に向けての改善点

(4) 管理機関における取組について

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

- ・英語教育、国際理解教育を推進するために、ALTを2名配置した。
- ・運営指導委員会に担当指導主事を派遣し、大学・企業・関係機関等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価をもとに指導・助言を行った。
- ・研究成果を発表する場として、県教育委員会が「国際問題を考える日」（2月11日）を主催する。

②事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・事業終了後、本事業の取組を持続可能なものにするために、一定の事業経費を計上し、支援する予定。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

- ・締結を行っていない。

4 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域課題に関する課題研究			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
地域課題から世界を考える日				中間発表		中間発表			中間発表	○		
テレビ会議等による海外校との協働学習			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ローカルキャリア教員養成セミナー											○	○
地域医療系人材養成プログラムの開発			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
地域公務員養成プログラムの開発			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
「ようこそ先輩」授業				中止					中止			○
進路探究 WEEK						○	○					

*新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休業：4月9日～5月29日

分散登校：6月1日～6月12日

*以下の項目は、新型コロナウイルス感染症拡大により中止した。

- ・ケント市、オーバーン市（アメリカ）における研修：7月派遣
- ・金海外国語学校（韓国）：8月派遣、2月受入
- ・東山高級中学（台湾）との交流：11月修学旅行

- ・ パンナサストラ大学（カンボジア）における研修：8月派遣
- ・ 丹波イングリッシュキャンプ：8月、2月
- ・ 在住外国人との共生：5月～2月

(2) 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

1年生 総合的な探究の時間「丹 BAL I」

・ 知の探究コース 研究テーマ

「丹波市の人口問題について」「丹波竜の認知を広げる活動－英語で世界に発信－」「丹波地域を活性化するイベント企画」「丹波地域の祭りについて－川裾祭をテーマに－」「鳥獣被害対策－鹿の利用について－」「丹波栗の有効活用について」「恐竜について」「丹波地域の観光振興について－丹波竜をテーマに－」

・ 一般クラス 研究テーマ

「市民活動・地域づくり」「空き家活用・地域づくり」「移住関連事業」「外国人から見た丹波の魅力」「教育」「丹波布」「丹波での仕事・企業」「丹波の三宝・地域の特産物」「丹波の森林・生態系」「丹波市行政の取組」「丹波竜」「鹿肉（ジビエ料理）」

2年生 総合的な探究の時間

・ 知の探究コース「探究Ⅱ」研究テーマ

「新しい授業形態に適した教室の机配置の提案」「萌えるコミュニティづくりとストレス軽減を目指すライフスタイルの提案」「オンライン授業は『教える』と『学ぶ』を繋ぐことができるのか」「教育格差と勉強法～今の私たちにできることはあるのか！？～」「脱プラスチックは本当に可能なのか」「フェアトレード商品の購入量を上げるための一考察」「丹波を元気にする特産品開発～甘酒お屠蘇の開発～」「障がい者の自己肯定感を育む環境づくり」「人口に影響される私たちの生活」「感染症に対する人々の認識について」

・ 一般クラス「丹 BAL 台湾」

月	内容	活動等
6	オリエンテーション	
	「台湾とは何か」	グループで話し合い、まとめた内容をクラス発表
	後藤みなみさん講演会「台湾 日本 人生」	
7	後藤さんの課題を受けて	グループで話し合い、まとめた内容をクラス発表
8	『台湾とは何か』担当箇所のまとめ	
9	夏休みのまとめ	グループで話し合い、まとめた内容をクラス発表
	台湾の高校生との交流準備	オンライン交流動画準備
10	台湾の高校生との交流準備 台湾（治平高級中学）とのオンライン交流	日本語によるグループ発表、意見交換
11	台湾の高校生との交流準備 台湾（台南第一高級中学）とのオンライン交流 書籍・講演会・交流を通じて学んだこと	動画について意見交換 発表準備

12	台湾（台南第一高級中学）とのオンライン交流 まとめ	動画について意見交換 「学んだこと」クラス発表
1	文章講座	
2・3	文章作成	

○11月17日、台南第一高級中学保護者会から、本校を含む日本の友好校5校各校にマスクを2,000枚送付いただき、オンラインでマスク贈呈式を実施した。

3年生

・総合的な探究の時間

4・5月の臨時休業期間中、新型コロナ関連の資料集を配布し、進路希望に関連づけて探究させた。その内容を、6月に3分間スピーチで発表し、相互評価を行った。

以降、「安楽死」「人種差別」「ネットでの誹謗中傷」「芸能人の政治的発言」「ミソジニー／マンスプレイニング」などをテーマにしたオリジナルの小論文指導プリントを提示し、論述練習により文章作成能力の向上を図った。また、「哲学的対話」「数学探究」など10講座をゼミ形式で実施し、各自で選択し活動した。

・学校設定科目「グローバル」

授業では、探究活動、動画作成、英語でのプレゼンテーションやディベートを実施し、海外とのオンライン交流を5回実施した。前 ALT（アメリカ・ウィスコンシン州）、前長期留学生（アメリカ・ワシントン州）、現 ALT の友人（オーストラリア在住）、台湾との交流を行った。初対面の人たちと英語だけでやりとりすることを重ねる中で、語学力が向上し、コミュニケーション力にも自信をつけるなど、成果をあげている。

インターアクト部

・韓国とのオンライン交流

金海外国語学校との交流活動を、オンラインで4回実施した。日本語文化研究部の生徒との交流であり、日本語での実施をした。自己紹介、進路について、日本で販売している韓国食材の紹介、日本のお菓子ランキング日韓比較をテーマに、グループ同士での意見交換をしながら、交流を深めた。交流を通して韓国への理解を深めることができた。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

以下の教科・科目において、地域との協働による探究的な学びを推進した。

1年生 総合的な探究の時間「丹 BAL I」

2年生 総合的な探究の時間

・知の探究コース「探究Ⅱ」

・一般クラス「丹 BAL 台湾」

3年生 総合的な探究の時間「総合Ⅲ」、学校設定科目「グローバル」

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

3年生選択科目「グローバル」を知の探究コースと一般クラスを対象に開講し、1・2学年の

2年間取り組んだ探究活動を継続できるようにしている。英語によるプレゼンテーションやディスカッションを行い、海外に向けて発信する力の育成を図った。

また、他の教科においても、昨年度作成したカリキュラムマップを基に、事業を通して育成する資質・能力を、各教科のどの単元で取り組むかを検討したり、教科横断的な学習の実施に向け、検討を進めた。

④類型毎の趣旨に応じた取組について

知の探究コースの生徒に、課題研究発表等に率先して取り組ませながら、一般クラスの生徒も含めて課題研究発表等に参加する機会を増やした。

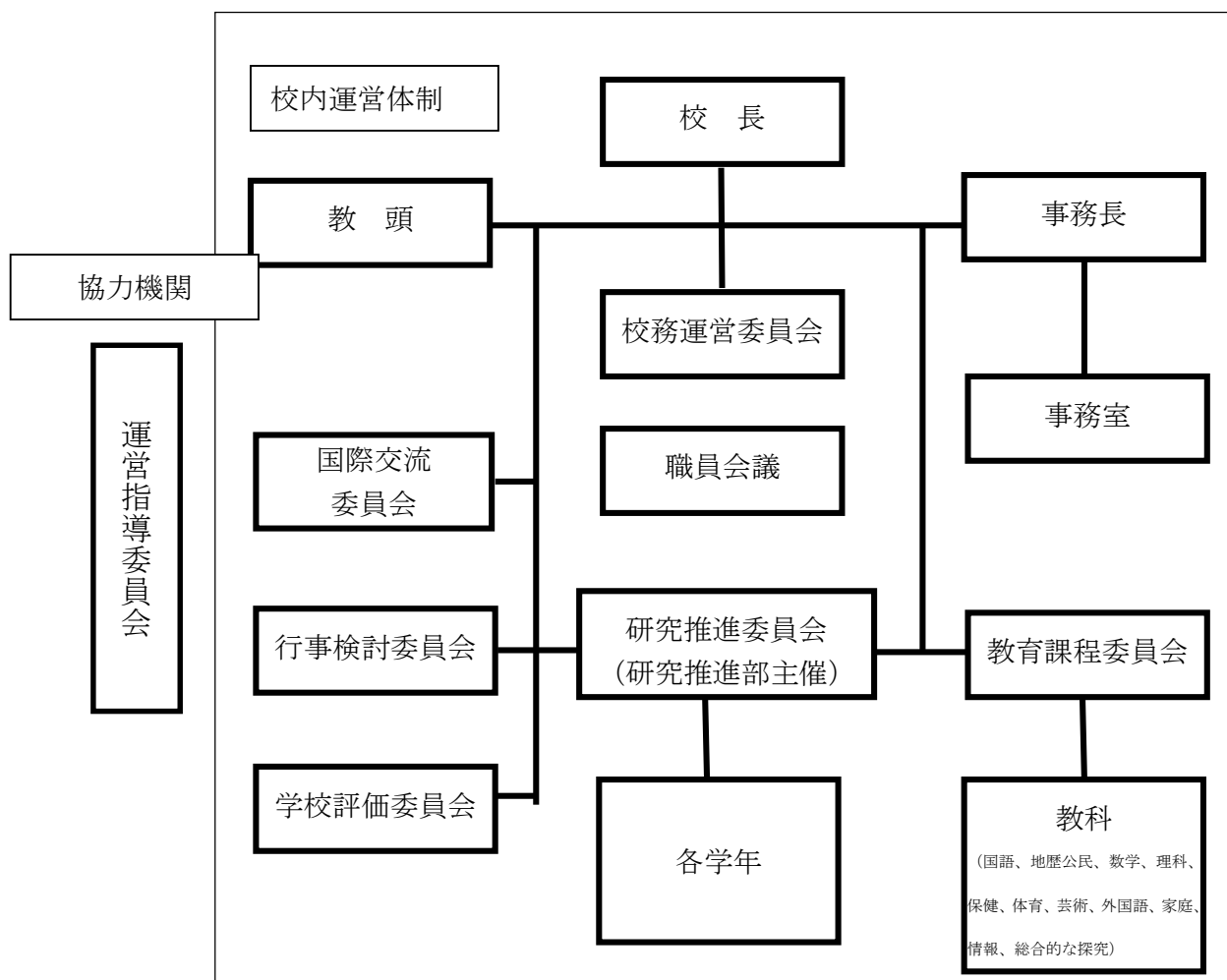
⑤成果の普及方法・実績について

・発表実績

12月20日	甲南大学リサーチフェスタ2020 「ロジカルデザイン賞」受賞
12月21日	全国高校生 MY PROJECT AWARD 2020 リフレクションプログラム
1月30日	Glocal High School Meeting 2021 【全国高等学校グローバル探究オンライン発表会】 英語発表部門「銀賞」、日本語発表部門「銅賞」受賞
2月6日	全国高校生 MY PROJECT AWARD 2020 関西 Summit
2月20日	全国グローバルリーダーズ summit in えびの（宮崎県立飯野高等学校）
3月20日	SDGs Quest みらい甲子園 第2回関西エリア大会

(3) 研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制
【校内運営体制】



各組織の主な役割

・運営指導委員会 大学教員・研究者・学識経験者・教育委員会の指導主事等で構成し、専門的な見地から事業全体について指導、助言、評価する。

(委員)

- ① 兵庫県立人と自然の博物館館長 中瀬 勲
- ② 福知山公立大学北近畿連携センター市民学習部長 杉岡 秀紀
- ③ 関西学院大学フェロー 高畑 由起夫
- ④ 丹波市観光協会会長 柳川 拓三
- ⑤ 神戸大学准教授 Rooks Matthew John
- ⑥ 兵庫県教育委員会事務局高校教育課主任指導主事 松岡 克晋

・研究推進委員会 研究推進部が研究推進委員会を主催し、地域との協働による高等学校教育改革推進事業全般の企画・立案・実施と各教科と連絡調整についての研究を行う。

・国際交流委員会 国際的活動や交流、姉妹校との協働の企画・立案・実施。

・行事検討委員会 校外活動の企画・運営・実施についての研究。

- ・教育課程委員会 教育課程についての研究。
- ・学校評価委員会 研究活動の評価方法および学校評議員との連絡調整についての研究。
- ・校務運営委員会 事業全般の検討と職員間の連絡調整。

【カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の学校内における役割・位置付け】

国際交流委員会、研究推進部、研究推進委員会は、海外交流アドバイザーの助言を受けながら運営する。また、生徒は課題研究において直接指導を受けることができることとする。

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

研究推進部が主催する研究推進委員会が、課題研究を指導する指導教員を支援する。研究推進部は、地域との協働による高等学校教育改革推進事業全般の企画・立案・実施と各教科との連絡調整を行い、課題研究において生徒を指導する指導教員を支援する。

③学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

研究推進部が、研究開発の進捗状況を確認し、研究推進委員会に報告する。

研究推進委員会として、運営指導委員会、海外交流アドバイザー、職員会議に報告し、進捗状況、計画・方法について評価を受ける。評価結果から研究推進委員会で検討・計画の改善を行う。

④カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- ・丹波市、丹波市教育委員会
課題研究の指導と助言
- ・丹波市国際交流協会
課題研究の指導と助言、国際交流の推進と助言
- ・丹波市商工会議所
課題研究の指導と助言
- ・丹波市観光協会
課題研究の指導と助言
- ・丹波医療センター
課題研究の指導と助言、地域医療系人材養成プログラムの推進
- ・福知山公立大学地域連携センター
課題研究の指導と助言、研究成果の発表の場の提供
- ・兵庫県教育委員会
ALTの2名配置、テレビ会議システム導入
本事業の推進に係る指導と助言

5 目標の進捗状況、成果、評価

全国及び地域での研究発表への参加は、平成30年度4大会、令和元年度9大会に出場しており、今年度も同様にその機会を持つ計画であったが、新型コロナ禍のため、中止されたものもあった。

オンラインで実施された発表会には積極的に出場し、甲南大学リサーチフェスタ 2020 では「ロジカルデザイン賞」受賞、Glocal High School Meeting 2021 では英語発表部門「銀賞」、日本語発表部門「銅賞」を受賞した。

また、今年度は、海外研修にかえて、台湾、韓国、アメリカ、オーストラリアとのオンラインによる交流を実施した。オンラインでの海外交流により、2年生では全員が海外の高校生と交流の機会を持つことができた。今年度新たに、台湾、カンボジアの学校とのオンライン交流を始め、今後も継続した交流ができることとなった。

今年度開講した、学校設定科目「グローバル」では、生徒が2年間取り組んだ探究活動に継続して取り組むことで、研究内容を深化させ、さらに英語でのプレゼンテーションやディベートを行い海外に向け発信するなど、成果を上げている。

・外部検定への取組推進

(卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベル以上の生徒の割合を25%にする取組み)

平成30年度10%→令和元年度15%→令和2年度15%

・研究授業を含めた地域課題研究に関する研修会を充実させる取組(目標10回)

平成30年度4回→令和元年度8回→令和2年度10回

・グローバルな社会又は地域課題に関する公益性の高い国内外の大会に参加する生徒を増やす目標(目標100人)

平成30年度40人→令和元年度80人→令和2年度84人

・課題研究に関して地域人材の参画を促す。(参画する延べ人数目標70人)

平成30年度40人→令和元年度80人→令和2年度90人

6 次年度以降の課題及び改善点

(1) カリキュラムの研究・開発について

令和3年度は、学校設定科目「グローバル」に関わる教科を広げ、課題研究をより深化させながら、教科横断型の授業の取組をさらに進めていく。

(2) グローバルサミットの開催について

海外交流の内容を発展させ、国内、海外の複数の学校による共通テーマでのディスカッションの場として、グローバルサミットを開催する。



2 今年度の活動実績一覧

1 はじめに

令和元年度文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受け、2年目が終わろうとしている。知の探究コースでは、地域課題をテーマに探究活動に取り組んでおり、その実践が評価され、4年間 SGH アソシエイト校の指定を受けていた（うち1年は「ひょうごスーパーハイスクール」指定）。歴史ある海外研修・国際交流の実績も活かし、全校あげての探究プログラム開発に努めている。

今年度は残念ながら、新型コロナウイルスの影響を受けて、年度当初に計画していた活動は制限され、海外研修は中止せざるを得なかったが、オンラインによる海外交流、国内研修に切り替えることで新たな可能性を見出しつつある。

2 「丹 BAL」～本校の総合的な探究の時間

(1) 「総合」「探究」の系統化

SGH アソシエイト時代から取り組むべき大きな課題は、一般クラスの「総合」を系統化することであった。知の探究コースは、課題研究の対象を地域課題に据え、丹波地域の抱える課題、魅力について探究を進めていたが、一般クラスでは学年裁量で進められていた。学年の担当者が、進路実現を目標に置いた計画を立て、各種講演会、面接・小論文指導などを行っており、年度によって内容が異なることもあった。昨年度、新しく立ち上げられた「研究推進部」が中心となり、学校として取り組める系統だったプログラムを考案した。「グローバル型」事業初年度は、それぞれの科目の狙いを、次のように定めた。

	「総合」	「探究」
ねらい	様々な角度から、世の中のことを学び、自己実現につなげる。	地域課題について学び、世界的課題と結びつけ、問題解決方法を提言する。
育む力	「読む・聴く」「伝える」「考える」「発表する」	
活動	文献講読・講演会・フィールドワーク・ディスカッション・プレゼンテーション	

一般クラスおよび知の探究コースのテーマは、

- 1 学年「総合Ⅰ」 柏高史・丹波人物誌・自分探し
「探究Ⅰ」 丹波地域の課題・魅力
- 2 学年「総合Ⅱ」 台湾学習
「探究Ⅱ」 地域課題から世界を考える
- 3 学年「総合Ⅲ」 進路実現

とし、自分の立っている場所、背景を考えた上で世界・社会に目を向けることを目的としている。



昨年度の「台湾学習」の一コマ

(2) 「丹 BAL」へ

指定2年目の今年度は、「課題解決型学習を全校で行うべきだ」という指摘を受け、本校

の歴史や丹波人物誌というテーマを新入生オリエンテーション時に残しつつ、「地域の魅力について学び、発信する」というテーマで再編成した。

それに先駆け、職員全員による研修会を開き、「育てたい生徒像」について話し合い、総合的な探究の時間を本校独自のものにするために、愛称を考案した。その結果、決まった「丹BAL」には、①地域について学び、地域で活動することを「丹波る」と動詞化、②「グローバル(=GLOBAL+LOCAL)」を言い換えて「ローカル」＝「丹波」から「丹BAL」、③「丹波で Be A Leader」、④「丹波で Best Achievement Learning」…といくつかの願いがこめられている。愛称を決めるにあたっては、生野高校が「ゆめいく」というネーミングで、独自の活動をされていることに触発されたことを申し添えておく。

1 学年では「地域の魅力をおすそ分け」と題して地域で活躍されている講師の方々に話を伺い、そこで学んだことを校内・地域で発信することになっている。2 学年では、自分たちの学校、土地、関心のあることを台湾の高校生・大学生に向けて発信することを活動の中心にした。



「丹BAL」クラス別発表会

(3) 学校設定科目「グローバル」

「総合的な探究の時間」の時数は、一般クラスは各学年で1 単位ずつ、知の探究コースは1 学年で1 単位、2 学年で2 単位と設定している。しかし、2 年間ではまとめきれない内容もあり、3 年間探究を続けたいというコースの生徒のために、選択科目「グローバル」を設定した。一般クラスでも同様に開講し、英語によるプレゼンテーションやディスカッションを行い海外の高校生に向け発表する機会も作った。

今後は、2 学年で2 単位の探究活動を行い、3 学年では進路、興味、関心に応じた選択ができるように幅を広げていきたいと考えている。



「しゃべランチ」に参加する「グローバル」選択者

3 コロナ禍の「丹BAL」

(1) 「丹BAL I」(旧「総合 I」「探究 I」)

「地域の魅力をおすそ分け」と題して、各分野で活躍されている講師にお話を伺い、班ごとにまとめて発表した。4 月に講座を聴講し、一人一人が興味ある分野へ進むことを計画していたが、2 か月遅れの開始となり、対面での講義も危ぶまれていたので、各講師に5 名程度の班を3 つ程度、こちらが割り振る形となった。3 回の講座を行い、12 月末に学年での

発表会を行った。夏季休業を利用してフィールドワークに出るべきところだが、今年は強く勧めることが出来なかった。しかし、電話インタビューを行う班もあり、生徒たちの機動力に感服した。講師陣は以下の通り。(敬称略)

一宮 祐輔	市民活動・地域づくり
出町 慎	空き家活用・地域づくり
小橋 昭彦	空き家活用・移住関連市政
中川 ミミ	移住関連事業
マイク トイ	外国人から見た丹波の魅力
和田 輝政	丹波での仕事
白川 やすよ	教育
イラズムス千尋	丹波布
谷水 諒	丹波での仕事・企業
柳川 拓三	丹波三宝・地域の特産物
宮川 五十雄	丹波の森林・生態系
荻野 雅文	丹波市行政の取り組み
田中 公教	丹波竜(恐竜)
鴻谷 佳彦	鹿肉(ジビエ料理)



「丹波の魅力をおすすめ分け」の一コマ

(2) 「丹 BAL 台湾」(旧「総合Ⅱ」)

本校の修学旅行は過去 8 年間、台湾を訪れている。2 学年での台湾学習はその事前学習を兼ねたものとして考案されてきたが、今年度は 4 月当初から海外への修学旅行を断念し、モチベーションの維持が懸念された。

自宅学習期間中、『台湾とは何か』(野嶋剛著:筑摩書房、2016)の第 2 章「台湾と日本」を読み、「台湾とは国なのか」という問いを課題として与えた。学校が再開されると、班ごとにこのテーマについて話し合い、発表の場を設けた。兵庫県人権教育研究協議会から後藤みなみ(王淑麗)さんをお迎えして講演会を行い、改めて「国とは何か」「国籍とは何か」を考える機会を持った。9 月には台湾・桃園市の治平高級中学と代表生徒がオンライン交流を行い、その様子を各教室で視聴した。以後、毎週月曜日の昼休みに有志がオンラインで交流している。11 月には台南市の台南第一高級中学と 2 回目の交流を持った。1 か月かけて学校、町、日本文化などを紹介する動画を制作し、YouTube に限定公開したうえで、お互いが事前に視聴し、タブレット端末で質問や意見交換



した。(前頁写真は、台南第一高級中学とのオンライン交流の様子。)

11月末には『台湾とは何か』の著者、野嶋剛先生の講演会を行い台湾学習の総括とした。コロナ対策で台湾が取った方策、同性婚の法制化、高い若者の投票率など、国と認められていない地域から、自分たちの国について学ぶことも多かったようである。

(3) 「探究Ⅱ」

テーマ決定にかける時間、フィールドワークのための夏季休業が短くなったことは痛手だったに違いないが、オンラインによるインタビューを行ったり、数少ない講演会やシンポジウムに出かけたりしながら、それぞれができる限りの探究活動を行ってきた。「オンライン授業は『教える』と『学ぶ』を繋ぐことが出来るのか」といったコロナ禍ならではのテーマで取り組んだ生徒もいた。

昨年は数多く出場した各種発表会は、ことごとくオンライン発表となったが、甲南大学主催の「リサーチフェスタ 2020」では「ロジカルデザイン賞」を受賞、「My Project Award 2020」では4つのプロジェクトが関西 Summit に駒を進めるなど昨年度にも勝る発表ができていることを誇らしく思っている。



知の探究コース合同発表会

探究Ⅱテーマ一覧

新しい授業形態に適した教室の机配置の提案
萌えるコミュニティづくりとストレス軽減を目指すライフスタイルの提案
オンライン授業は「教える」と「学ぶ」を繋ぐことが出来るのか
教育格差と勉強方法～今の私たちにできることはあるのか！？～
脱プラスチックは本当に可能なのか
フェアトレード商品の購入量上げるための一方策
丹波を元気にする特産品の提案
障がい者の自己肯定感を促す環境づくり
人口に影響される私たちの生活
地域を元気にする特産品（甘酒お屠蘇の開発）

(4) 「グローバル」・オンラインによる海外交流

知の探究コースでは1名が選択し、2年次からの継続テーマ「スタンディングデスクを活用した授業改善」について英語で論文を書き、英語でプレゼンテーションをした。論文を書くために、再度英語の文献を精読し直し、3か月間かけて推敲した。この研究は昨年度、

鹿児島で行われた第5回高校生国際シンポジウムにおいて、教育・ジェンダー部門で優良賞（第3位）を受賞したものである。「授業により集中でき、アクティブラーニングの特性を活かすために、スタンディングデスクを取り入れることを提案する。さらに、地域の森林の管理を改善し、木材の地産地消を進めるために地元間伐材を利用したオリジナルスタンディングデスクの制作に取り組む」というもので、進学後も取り組んでもらいたいテーマである。

一般クラスでは8人が受講し、①自分の将来について5分間スピーチ、②英語で学校紹介動画作成、③コロナ禍で変わった生活～TV番組作成の3本立てで進めた。いずれも、1学年・2学年で取り組んだ内容を活かして英語で行っている。アメリカ・ワシントン州の元交換留学生二人、ウィスコンシン州在住の元ALTや、オーストラリアにいる現在のALTの友人ともオンラインで繋がることで、慣れすることもできたようだ。1月にはカンボジア、バタンバンインターナショナルスクールとの交流を予定している。



第5回高校生国際シンポジウム表彰式

4 ポストコロナの「丹BAL」

大きなハンディを背負った一年だった。しかし、同時に収穫も大きかった。オンラインで出来ること、対面でないと出来ないことも探究活動を通して見えてきたように思える。「コロナ禍だから無理」ではなく、「コロナ禍だからこそ、できることを」と発想を転じることで、答えのない問題に取り組む姿勢も高められたように思う。スマホやタブレット一つあれば、海を隔てた仲間とやりとりできる。海外渡航が止められている今、一つの有効な手段である。YouTuberがあこがれの職業と言われる今日、動画作成に長けた生徒も数多くいる。面と向かって英語で表現できなくても、翻訳ソフトを駆使し、字幕付きの映像によって自分を表現できることも発見できたはずである。「コロナだからオンライン」ではない。オンラインで遠方の教授の話が聞け、他校の生徒の発表が見ることが出来ることは、今後も役に立つことだろう。コロナがあろうとなかろうと、変わらない学びが続けられるように努めたい。

私たちに課せられた「宿題」には、もう一つ、「教科横断型」のカリキュラム開発が残っている。全職員・全教科が、生徒たちに負けないよう、共通の問いに向かって、探究し続ける一年にしたい。



治平高級中学（台湾）と昼休みオンライン交流

*本稿は『兵庫教育』令和3年3月号に寄稿したものを一部編集した。

「カリキュラム改革」

教務部長 井戸 英剛

柏原高校では2019年度よりカリキュラム改革に取り組んできた。

本校ではすでに知の探究コース（1クラス）で、総合的な学習の時間として、1年生で探究Ⅰ（1単位）、2年生で探究Ⅱ（2単位）を設定し、その中で探究活動を行ってきたが、それに加えて「グローバル」（総合的な学習の時間）創設等のカリキュラム改革、カリキュラムマップの作製に取り組んだ。

1 「グローバル」（総合的な学習の時間）の創設

まず、2020年度から3学年の選択科目に「グローバル」（総合的な学習の時間／2単位）を創設し、知の探究コースと一般クラスの生徒が選択できるようにした。知の探究コースは1年生・2年生の探究Ⅰ・探究Ⅱで行ってきた探究活動の内容を深めていくことに加え、英語を使ったプレゼンテーション・論文作成など、より高度な内容を生徒が自ら行うこととした。一般コースは1・2年生の総合的な学習の時間（総合Ⅰ、総合Ⅱ）で十分な探究活動が行えなかった分、少人数に絞ったグループ活動を通して、探究的な活動、動画作成、英語を使った会話などの活動を行う。生徒の能動的な活動が見られ、自ら考え、解決方法を探る学習ができ、確実に成果をあげている。現在は、次年度に向け、一般クラスのグローバルの授業の規模を拡大することに取り組んでいる。あらゆる教科の教師が参加し、少人数グループを増やして、多くの生徒が選択できるようにしていきたいと考えている。また、今年度からは一般クラスの1年生の総合Ⅰでも探究活動の要素を取り入れ、グループ活動、発表などを行っている。

2 カリキュラムマップの作製

今まで本校では教科ごとに年度当初にシラバスを作成してきたが、2019年度より1学年1シートのカリキュラムマップの作製にかかり、一目ですべての教科の学習内容が月毎に分かるよう示すようにしている。教員が他の教科の内容や時期を知ることにより、教科の枠を超えて協力できる体制をつくることを目標とした。まだ、教科連携することはこれからの課題ではあるが、教科の壁をなくして、一般の授業でも探究的な活動がしやすい環境づくりを行っていききたいと考えている。また、本校では以前からグループ学習・アクティブラーニングを取り入れた授業がある一方で、旧来の講義型の授業も数多く存在している。年2回の授業公開週間を設けて、授業改善に取り組めるようにしているが、まだまだ教師間・教科間の壁は高く、授業参観だけにとどまっているのが現状である。

3 今後について

2022年度からの新学習指導要領の導入にあわせて、一般クラスの総合的な探究の時間の増設と内容の精選を行い、知の探究コースで行っているような探究活動を一般クラスにも導入し、探究活動が全クラス、全授業で行えるようにしていきたい。

しかし、その充実のためには全教員の意識を変革する必要がある。探究活動を取り入れた授業について、教員全員の理解が進んでいるとは言い切れず、研究推進部、授業担当者だけが取り組んでいるのが現状である。研修等で意識改革を進めることが必要である。

カリキュラムマップ

学校行事		4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語総合	5単位	随想/随話	随想/随話	随想/随話	随想/随話/随筆	随想/随話/随論	随想/随話/随論/小説/物語	随想/随話/随論/小説/物語	随想/随話/随論/小説/物語	随想/随話/随論/小説/物語	随想/随話/随論/小説/物語	随想/随話/随論/小説/物語
現代社会	2単位	知の体力/尻のぞら	現代政治の民主政治と政治参加の意義	現代政治の民主政治と政治参加の意義	現代政治の民主政治と政治参加の意義	現代政治の民主政治と政治参加の意義	現代政治の民主政治と政治参加の意義	現代政治の民主政治と政治参加の意義	現代政治の民主政治と政治参加の意義	現代政治の民主政治と政治参加の意義	現代政治の民主政治と政治参加の意義	現代政治の民主政治と政治参加の意義
数学Ⅰ (知の探究)	4単位	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析
数学Ⅰ	2単位	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析	データの分析
数学A (知の探究)	4単位	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率
数学A	2単位	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率	場合の数と確率
物理基礎	2単位	運動の法則	運動の法則	運動の法則	運動の法則	運動の法則	運動の法則	運動の法則	運動の法則	運動の法則	運動の法則	運動の法則
化学基礎	2単位	物質の構成	物質の構成	物質の構成	物質の構成	物質の構成	物質の構成	物質の構成	物質の構成	物質の構成	物質の構成	物質の構成
地学基礎	2単位	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成	地球の大きさ・地球内部の構成
体育	3単位	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動
保健	1単位	リズムトレーニング	リズムトレーニング	リズムトレーニング	リズムトレーニング	リズムトレーニング	リズムトレーニング	リズムトレーニング	リズムトレーニング	リズムトレーニング	リズムトレーニング	リズムトレーニング
音楽	2単位	合唱・ギター基礎1	合唱・ギター基礎2	合唱・ギター基礎2	合唱・ギター基礎2	合唱・ギター基礎2	合唱・ギター基礎2	合唱・ギター基礎2	合唱・ギター基礎2	合唱・ギター基礎2	合唱・ギター基礎2	合唱・ギター基礎2
美術	2単位	導入・明暗の表現	観察表現	観察表現	観察表現	観察表現	観察表現	観察表現	観察表現	観察表現	観察表現	観察表現
書道	2単位	書写から書道へ	書写から書道へ	書写から書道へ	書写から書道へ	書写から書道へ	書写から書道へ	書写から書道へ	書写から書道へ	書写から書道へ	書写から書道へ	書写から書道へ
コミュ英	3単位	L1 100人の村	L2 伝説文化	L3 教育	L4 環境	L5 ボランティア	L6 科学	L7 スポーツ	L8 資源	L9 経済	L10 競争・平和	L11 比較
英語表現	2単位	L1 分の種類	L2 文型と動詞	L3 動詞	L4 完了形	L5 助動詞	L6 受動態	L7 不定詞	L8 助動詞	L9 分詞	L10 関係詞	L11 比較
家庭基礎	2単位	人の一生と青年期と現代社会の課題	子育てを学ぶ	子育てを学ぶ	子育てを学ぶ	子育てを学ぶ	子育てを学ぶ	子育てを学ぶ	子育てを学ぶ	子育てを学ぶ	子育てを学ぶ	子育てを学ぶ
社会と情報	2単位	情報のデジタル化	情報の表現と伝達の仕組み	情報の表現と伝達の仕組み	情報の表現と伝達の仕組み	情報の表現と伝達の仕組み	情報の表現と伝達の仕組み	情報の表現と伝達の仕組み	情報の表現と伝達の仕組み	情報の表現と伝達の仕組み	情報の表現と伝達の仕組み	情報の表現と伝達の仕組み

【丹 BAL 1】(第 1 学年) 年間予定(コロナ後)

月	日	テーマ	1 組	2 ~ 6 組
6	10	「オリエンテーション」 (柏陵会館)		
6	24	「地域の魅力を持ち寄ろう！」(各 HR 教室)		
7	1	テーマ決定：		
7	8	グループで自分たちの取り組む分野・テーマを決定		
7	15	「地域の魅力をおすそ分け」(各 HR/選択教室) *外部講師 14 名		
7	29	柏原高校の歴史【特別講演：大西伸弘 前校長先生】		
夏休み		*フィールドワーク (インタビュー・イベント参加・アンケート・実験等)		
8	26	夏休みのまとめ	グループで話し合い	グループで話し合い
9	2			クラス発表
9	9		中間発表ポスター作成	各講座ごと
9	23	発表・発信に向けて	特別講座：小川周平先生「効果的なポスター発表」	
9	30	講座発表	中間発表	丹波の魅力のおすそわけ
10	7			「おすそ分け」振り返り
10	21	作成・準備		
10	28			
11	4			
11	11	講座発表	クラス内発表	講座内で発表練習
11	18		(高畑先生指導)	
11	25	クラス発表	クラス、全担当者の前で	クラスごとに発表会。
12	2		発表。質疑応答。	質疑応答。
12	16	クラス発表 (予備)	全体発表に向け手直し	全体発表準備
12	21	発表会	知の探究コース発表会	
12	22	学年全体の発表会		
1	13	まとめ	アンケート・担当者面談	アンケート・感想
1	20	文章の書き方	論文講座	文章の書き方
1	27	文章作成	小論文作成	レポート作成
1	29	地域課題から世界を考える日 (丹波の森公苑)		
2	3	文章作成	小論文作成	レポート作成
2	10			
2	17		小論文作成 (提出)	レポート作成 (提出)
2	24	総括「丹 BAL 2 へ」(柏陵会館)		

【丹 BAL 台湾・探究Ⅱ】(第 2 学年) 年間予定

月	日	内容	1 組	2～6 組
6	2	オリエンテーション (分散登校前半)		
6	9			
6	16	課題について 研究計画	課題研究(研究計画作成)	「台湾とは国か」
6	23			クラス内発表 (班)
6	30	後藤みなみさん講演会		
7	7	後藤みなみさんからの 課題を受けて	課題研究 (グループ別活動)	課題について班協議
7	14			クラス内発表 (班)
夏休み		フィールドワーク・ 「台湾とは何か」担当箇所のまとめ		
8	25	夏休みのまとめ	グループ活動	グループで 各章をまとめる
9	1			
9	8		ポスター論文作成	クラス発表
9	15			台湾の高校生との オンライン交流動画 準備
9	29		ポスター提出	
10	6	台湾との交流準備		
10	20		章構成提出	
10	27	台湾の高校生とのオン ライン交流	ポスター・論文作成	台湾高校生の交流動画 台湾オンライン交流
11	10			
11	17			
11	20	野嶋剛さん講演会		
11	24	発表会に向けて	ポスター・論文作成	年間の振り返り発表準備
12	1			
12	8	まとめ	ポスター・論文提出	「学んだこと」クラス 発表
12	15		発表(クラス内)	
12	22	学年全体発表		
1	12	アンケート・自己評価		
1	19	(アンケート・自己評価) 総括：全体集会		
1	26	文章講座	論文講座	文章講座
1	29	地域課題から世界を考える日		
2	2	文章作成	論文完成	文章講座
2	9	文章作成	論文提出	文章講座
2	16	総括		

【総合Ⅲ】（第3学年）今年度の主な流れ

月	テーマ	内容、指導上の留意点など
4	新型コロナウイルス (休校期間中)	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス関連の資料集を送付。 ・進路希望に関連付けて探究するよう指示。 ・ワークシートも合わせて郵送。
5		
6	3分間スピーチ	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマは新型コロナウイルス。 ・クラス単位で実施（2時間）。 ・相互評価を行う。
	面接について	<ul style="list-style-type: none"> ・学年全体での指導を実施。 ・「近畿統一用紙」と「社用紙」について。（人権） ・面接試験、小論文試験の指導に止まらぬよう留意。
7	小論文について	
8	小論文について	<ul style="list-style-type: none"> ・「安楽死」、「人種差別」、「ネットでの誹謗中傷」、「芸能人の政治的発言」、「ミソジニー／マンスプレイング」などをテーマにした新聞記事等を取り上げたオリジナルの小論文指導プリントを配布。
9	小論文について	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスで小論文指導。
	ゼミ形式での講義	
10		
11		
12		
1	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・「学び続けることの大切さ」についてプリント配布。



「総合Ⅲ」新型コロナ、小論文等オリジナルテキスト。このような形でプリントを配布し、授業時間の不足を補った。

3 丹BALI「丹波の魅力をおすそ分け」

以前から本校では「地域課題解決」を探究テーマに据えて取り組んできたが、「『課題』という表現はネガティブなイメージがしまいか」との指摘を受け、今年度はそれを「丹波の魅力をおすそ分け」とし、特に1学年（6クラス 240名）の丹BALIでは、丹波在住の14名の外部講師を招き取り組んだ。講師の方々にお集まりいただいたのは計3回で、初回（7月15日）はオリエンテーション・ガイダンス、2回目（9月30日）は中間発表の指導、3回目（12月2日）はゼミ内での最終発表会を行い、代表班を選出した。各ゼミの代表班による学年発表会は12月22日に本校北体育館で行われたが、そちらにも多くの講師の方々が駆けつけてくださり、熱心なご指導にこの場を借りて改めてお礼申し上げたい。講師の方々のお名前とご職業／担当ジャンルは以下の通りである。（敬称略）

一宮祐輔（丹波市市民活動支援センター／市民活動・地域づくり）
出町慎（関西大学研究員（佐治スタジオ）／空き家活用・地域づくり）
小橋昭彦（丹波市市議会議員／空き家活用・移住関連市政）
中川ミミ（一般社団法人Be代表理事／移住関連事業）
マイクトイ（3Roastery代表／外国人から見た丹波の魅力）
和田輝政（和田しすてむ代表／丹波での仕事）
白川やすよ（キャリアコンサルタント／教育）
イラズムス千尋（丹波布作家／丹波布）
谷水諒（谷水加工板工業(株)／丹波での仕事・企業）
柳川拓三（(株)やながわ代表取締役／丹波三宝・地域の特産物）
宮川五十雄（特定非営利活動法人森の都研究所代表理事／丹波の森林）
荻野雅文（丹波市役所職員／丹波市の取り組み）
田中公教（丹波竜化石工房研究普及専門員／丹波竜（恐竜））
鴻谷佳彦（NPO法人Imagine 丹波代表／鹿肉（ジビエ料理））

上記3回の外部講師による授業以外は、本校教員（述べ18人。知の探究コース8人、一般コース2人×5組＝10人）により指導を行ったのであるが、初めての試みゆえ、担当する教師側に不安や戸惑いがあったり、また、外部講師とのやりとりも研究推進部が常に間に立ったりと、まだまだ今後改善の余地・可能性はあるように思われる。

なお、説明の順序が前後したが、丹BALIは、知の探究コースは週2時間、一般コースは週1時間で行った。知の探究コースは、運営指導委員の高畑由起夫先生から探究の方法についてご指導いただいたり、また、学年全体で、こちらも丹波の教育に関わっておられる小川周平さん（小川教育研究所所長）よりプレゼンテーションの手法について教えていただいたりなどし、また、小川さんには「おすそ分け」にもアドバイザーとして加わっていただいた。

次頁以降、本企画のコーディネーターである鴻谷佳彦さん、1学年生徒（知の探究コース2名・一般コース1名）、授業担当教員（知の探究コース担当・一般コース担当）の声を紹介したい。

「柏原高校「丹 BAL」の感想 ～グローバルリーダーの育成をめざして～」

鴻谷 佳彦（コーディネーター）

「グローバルな視点で地域課題解決に主体的に取り組むグローバルリーダーの育成」と言うことで、昨年度からアドバイザー・コーディネーターとして関わらせていただいています。

今、社会は、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」の時代へと移行しています。

実際、地元の会社でも今までのように「良い商品を開発すると売れる」という開発重視の経営から、商品やサービスを「心に響くものを、どのように最終消費者に訴求していくか」を重視する流れになっています。それは会社の中でも、ただ単に上司などに言われたことを精度を高めて返すという今までの社員に求められてきたこととは異なり、社内の問題を主体的に考え、上司と一緒に考えていくという流れになっています。



正解が見えにくい時代に、目の前に起こっている問題（マイクロな視点）と、世の中に起こっている問題（マクロな視点）の両方に目を向けながら、解決していく能力が必要になっています。まさに今生徒が行っている、主体的に考え、正解がわかりにくい地域課題に取り組む授業内容は今からの時代にぴったりの教育だと感じます。

「グローバル」がマクロな視点だと考えるなら、「地域課題」はマイクロな視点となり、地域の方々にインタビューやアンケートをとることで地域課題を掘り下げていきました。また、地域の最前線で活躍されている方々からの意見を交え、地域課題を生徒たちの視点で解釈し主体的に取り組んでいます。

今年度は丹波の方や生徒など身近な人への発表なので前提というものが共有されていますが、来年度は学習の視点を変えて、グローバルな視点での研究をします。

そのためには、まったく前提がわからない方にも興味を持ってもらえるように発表しなくてはなりません、全く丹波の歴史や地域に興味もない、そもそも日本を知らない方々にも興味を持ってもらう、誰の目線で発表しその発表でどんなことを思ってもらいたいか、発表の目標が具体的に決まってくると自ずと調べる内容も、調べ方も具体的に絞る学習へと移行していきます。

昨今、情報社会と言われ、情報技術の発達によるコミュニケーションが多様化し、特に海外への情報発信も容易になりました。生徒の研究内容が海外の方にどのように興味を持ち感じ取ってもらえるのか、今後も楽しみに授業を見守りたいと思います。

「人とふれあうことの楽しさについて」

1年1組（知の探究コース）中尾 友香・木村 千晴

私たちは丹波市に広く分布している川裾（かわすそ）祭りに興味を持ち探究活動してきました。探究活動のひとつとして、それぞれ川裾祭りを開催している4つの地区の主催者さんのもとにフィールドワーク（インタビュー）に行きました。同じ名前でも同じ市内で行われているのに、地域によって異なる点があり、小規模なお祭りである川裾祭りには隠れた魅力がたくさんあると感じ、調べていてとても楽しかったです。

異なる点として、歴史や場所はもちろん、川裾祭りを主に運営されている主催者さんの思いにも違いを見つけることができました。「多くの人に来てほしい」一方で、「地元の人により愛されたい」。このふたつの意見をどちらも叶えるために、私たちに何ができるのかを考えました。班員と千思万考した結果、まずは「知ってもらう」ことから始めてみるという考えに繋がりました。そこで、来年度は川裾祭りについてより詳しく説明されているオリジナルのホームページを作成し、大勢の人に川裾祭りを知ってもらうきっかけを作りたいと考えています。



12月に行われた校内の発表会ではさまざまなアドバイスをいただき、この研究テーマが、地理的、歴史的、文化的にもまだまだ広がり、深まっていく可能性を持つものだと知り、今後への探究心がますます湧いてくるとともに、様々な人との対話が学びを深めるんだということをつくづく実感した「探究I」の授業でした。

「これからも地域の魅力についての探究活動を！」

1年6組（一般クラス）吉田 結

私たちの班では、「地域を活性化させるためにはどうすれば良いのか」というテーマで探究活動を進めました。

「地域活性化について探究するのであれば、例えば徳島県神山町を参考にしてください」と講師に来ていただいた小橋昭彦先生にアドバイスしていただき、神山町について調べることからスタートしました。

最初は、名前も場所も知らない土地だったのに、最終的には、神山町役場に電話インタビューまでさせていただき、インタビューを通して実際の苦労話やこれからの改



善点なども教えていただけたので学べたことは大きかったと思います。

私はこの探究活動によって、自分の住んでいる地域の問題に関心を持てるようになりました。これからは、地域のイベントやボランティア活動により積極的に参加し、都会の人や海外の人に対しても丹波地域の魅力を発信できるようになりたいと思います。

また、来年の探究活動ではもっと自分の興味のある分野について深く調べることで自分の将来に、そして人の役にたてるような探究にしたいと思っています。

「探究Ⅰについて ～探究活動を通じての生徒たちの成長～」

芦田 悠（探究Ⅰ担当／1年1組（知の探究コース）担任）

この授業は、丹波地域が抱えている課題の中からテーマを選定し、世界的な課題と結びつけて問題解決方法を提言するということを究極の目標としている。

今年度は、新型コロナウイルスの流行により例年よりも2か月遅れてのスタートとなった。

1学期（6・7月）はテーマの選定と夏休み以降に行うフィールドワークに向けての調べ学習が活動の中心となった。テーマ設定の真ただ中に関西学院大学の高畑由起夫先生による特別授業を受ける機会があり、リサーチ手法を学ぶ機会もあった。各グループが選定したテーマは、人口問題や丹波竜・特産物・地域の行事を利用した地域の活性化などであった。

夏休み以降、すべてのグループがフィールドワークを行った。行先は、丹波市内のちーたんの館などであった。

2学期（8月下旬～12月）は、多くの発表を経験した。9月30日、「丹波の魅力おすそ分け」の講師の先生方に向けて中間報告を行った。11月25日には、各グループがクラス全体に向けて発表を行った。例年は校外での発表に向けてポスター発表を行うが、今年度はスライドショーを使用しての発表となった。他のグループの発表を聞くのはその時が初めてで、生徒たちは、相互にアドバイスを送ったり質問をしたりしていた。

12月に入ると、数回プレゼンテーションを行う機会があり、説得力のある発表ができるようになってきた。

12月2日に、「丹波の魅力おすそ分け」の講師の先生方に発表見ていただき、貴重なアドバイスや、質問をいただいた。それを基に内容に改善を加え、12月21日に、知探究発表会で発表を行った。この発表では、より聴衆とのやりとりが活発に行われた。聴衆は主に同級生と2年生の知の探究コースの生徒で、1年生の生徒にとって想定外の質問や先輩としてのアドバイスを貰うことができた。

今後は、1年間の経験を踏まえ問題解決方法の提言という目的までいかに持ってい



くかが大切になってくる。2年時の探究Ⅱでは更にテーマを掘り下げて取り組んでいきたい。また、来年度は校外での発表にも積極的に参加していきたい。

「総合Ⅰについて ～探究活動で育む総合的な学力～」

河野 宙（総合Ⅰ担当／1年一般クラス担任）

「丹波の魅力を発信しよう」という大テーマをもとに、まず各クラス5人×8班のグループを作り、自分たちで調べてきたことを持ち寄り、班ごとのテーマを決定した。7月15日には「地域の魅力をおすそわけ」と題し、主に丹波地域で活躍されている14名の講師の先生方に来校いただき、各班のテーマに沿った講演や助言をいただいた。夏休みには、フィールドワークに行き、聞き取り等を行った班もいくつかあった。

夏休みが明けてからは、講座ごとの発表に向け、それぞれの班が「自分たちが1番伝えたいことは何か」というところに焦点を当て協議を重ねた。パワーポイントを使い発表を行う班が多く、そのほかはポスター等を使って工夫したものを作成した。9月30日には講師の方々にも再度来校していただき、中間報告を行った。各班アドバイスをいただきながら、発表に向け試行錯誤を重ねている様子がみられた。

12月2日には講座ごとの発表を行い、代表班が決定した。各班、工夫を凝らした発表となっており、丹波の魅力や、今まで知らなかったことが多く紹介されていた。

12月22日に行われた全体発表会の場で、各講座代表の14班が発表を行った。代表ということもあり、パワーポイントをうまく活用しながら観衆の視覚や聴覚に訴え、より分かりやすく丹波の魅力を伝えていた。

この一連の調べ学習・発表を通して、丹波の魅力を再発見し、さらに掘り下げることができた。また、「聴く・読む力」「伝える力」「考える力」「発表する力」を総合的に身につけることができたのではないかと思う。各班が発信・提案したことを、次は実現できるような取り組みに繋げていけると面白いのではないだろうか。



【発表テーマ一覧】

《知の探究コース（1組）》

- 「イベントで丹波を盛り上げる」「川裾祭り」「鹿肉を丹波の特産品へ」
- 「人口に影響される私たちの生活」「丹波栗の魅力を探ろう」
- 「丹波竜の魅力を海外に発信しよう」「丹波竜の魅力を伝え丹波市を活性化させよう」
- 「丹波竜を目的として丹波市に観光に来てもらうには」

《一般クラス》

・ 2組

- 「祭り」「祭りの活性化のために」「高齢者と産業」「交通」
- 「高齢者と産業～高齢者が生活しやすく、働きやすい社会にするために～」
- 「山の利用方法」「丹波の工芸品～地域のごみを再活用する先人たちの知恵～」 「城」

・ 3組

- 「田舎と高齢者社会」「丹波竜について」「丹波市・丹波篠山市の観光と祭り」
- 「丹波の特産品(モノの価値)を活かしたコトの価値を考える」
- 「祭りであっしょい！！～現代の祭りの現状～」 「丹波布について」「丹波栗について」
- 「古市義士祭と赤穂義士祭～2つの義士祭の共通点とルーツ～」

・ 4組

- 「空き家の活用について」「イベントを活用して丹波市を活気づけよう」
- 「柏原の歴史について～観光客に楽しんでもらうために～」 「鹿の可能性」
- 「観光地のPR方法」「地域の人口問題」「祭りを通じて丹波市の伝統を守ろう」
- 「イベントを使った町おこし」

・ 5組

- 「丹波市の観光地の魅力を伝え丹波をPRする！」「丹波竜の魅力」
- 「丹波大納言小豆について」「丹波の特産品」「丹波のナタマメ」「丹波の祭り」
- 「伝統と方言」「丹波の薬草について」

・ 6組

- 「大納言小豆の魅力」「なぜ丹波市には名字の偏りがあるのか？」「丹波竜を search」
- 「丹波に住んでもらうために…私たちが考えたこと」「ちーたんについて」
- 「吉見伝左衛門について」「身近に根付く檜皮葺の文化」
- 「『麒麟がくる』を使った町おこし」



(写真は、1月29日、「地域課題から世界を考える日」での発表の様子。)

4 丹 BAL 台湾

1. はじめに

第2学年総合的な学習の時間は「丹 BAL 台湾」という名称で、台湾学習を中心に進めてきた。本年度は当初から修学旅行先の国内への変更が予想されたため、学習内容も変更することが検討されたが、「グローバルリーダーの育成」のためには台湾学習は最適であると判断し、台湾修学旅行がないことを前提にプログラムを調整しながら学習を進めた。(結果的に修学旅行は中止となった。)

2. 学習テーマ

- ① 台湾を知る ② 日本を知る ③ 世界を知る

3. 身につけさせたい力

- ① 読む力・聴く力 ② 伝える力 ③ 考える力 ④ 発表する力

4. 学習内容

- ① 『台湾とは何か』野嶋剛著(ちくま新書)の読解

各班が割り当てられた一章を読み、紙芝居形式にまとめた。

- ② 台湾高校生(台南第一高級中学校・桃園治平高級中学校)とのリモート交流

自分たちの国や学校生活などを紹介した動画を作成し、それを事前に視聴した上でリモート交流を実施した。

- ③ 後藤みなみ氏講演会

日本に帰化された後藤氏の講演。主に「国とはなにか?台湾は国なのか?」という問いかけがなされ、日本・台湾・国家・世界などについて深く考えさせられた。

- ④ 野嶋剛氏講演会

①の『台湾とは何か』の著者である野嶋氏の講演。「なぜ台湾の若者は選挙に行くのか?なぜ台湾の人は日本に好意的なのか」という問いかけがなされ、台湾の現状を知り日本と台湾の関係を考える上で効果的であった。

5. まとめ

上記「4」の①・②の活動において、台湾を知るとともに、台湾高校生に日本を紹介したことなどから、改めて自分たちの生活や日本を見つめなおすことができた。「4」の③・④の講演会では、講師にその講演のねらいを事前に伝えていたこともあり、①・②の活動を効果的に補助できた。また、①・②の活動は4~8人程度のグループ活動が主体であり、発表も数回取り入れたことで、上記「3」の身につけさせたい力も向上した。



加油、台湾！ 加油、日本！ 加油、柏高！

ジャーナリスト・大東文化大学特任教授 野嶋 剛

今年11月、兵庫県立柏原高校を訪れた。丹生憲一先生ら同校において台湾修学旅行を含めた台湾学習コースを担当する教員の方々からお声がけいただき、昨年が続いて台湾学習授業の一貫として講演を行うためだった。秋の丹波地方の美しい紅葉のもと、台湾に関して1年間学びを重ねた2年生たちとじっくり語り合える得難い機会を楽しみにしながら、東京から新幹線、在来線を乗り継いで現地入りした。

生徒たちには拙著『台湾とは何か』（ちくま新書）をテキストとして使ってもらっている。大学生や社会人に台湾入門書として読まれている本だが、一生懸命読み込んでくれていることが会場の雰囲気から伝わってきた。私にとってもこれは嬉しいことだ。この本を2016年に執筆した理由に、日本の若い世代で台湾への理解がもっと進んで欲しい、という願いがあった。

日本と台湾の間には50年間におよぶ植民地統治など複雑な歴史を経てきた。ただ、昨今は、東日本大震災への台湾の200億円もの義援金への感動を含めて、日台間の相互感情は現在きわめて良好で、人的往来も活発に行われている。

その台湾について、日本ではグルメやレジャー情報は溢れているが、台湾が取り組む同性婚の合法化や脱原発政策、そして、選挙での75%という高い投票率が示す民主主義の堅実な実践などについて、十分に知られているとは言い難い。最近は、すぐれたコロナ対策で感染の広がりを抑え込み、世界の注目を集めている。台湾が日本より進んでいる点も多く、生徒たちには「台湾から学ぶ」という姿勢で台湾と接するべきだと伝えさせてもらった。

昨年の生徒たちは私の講演を聞いたあとに台湾に向かうことができたのに対して、残念ながら、今年の生徒たちは新型コロナウイルスのため、台湾の現地訪問が叶わない。講演では、現地の動画を多数見せることで台湾の空気を少しでも感じてもらえるようにした。質疑応答では多くの質問も寄せられた。彼らには台湾に近い将来、ぜひ行って台湾の良さを自分の目で確かめて欲しい。「台湾はみなさんを待っています」と語りかけて、講演を締めくくった。



講演会后、質問した生徒たちには『なぜ台湾は新型コロナウイルスを防げたのか』が贈呈された

「台湾学習」にかかわって思ったこと

兵庫県人権教育研究協議会 後藤 みなみ（王 淑麗）

2016年より2年生の教科「総合」が台湾学習と位置づけられ、人権学習、異文化理解学習の一環として、台湾について講演させていただきました。日頃から日本の高校生の台湾に対する印象といえば、夜市やタピオカミルクティなどがほとんどということに危惧し、台湾の歴史と文化について、正しく理解してもらえる良い機会だととらえています。また、私自身も日本から見る今の台湾について、知ることができて、感謝しています。

今年度は、コロナの影響で台湾修学旅行は取りやめになりましたが、2020年6月30日に「多文化共生をめざして～私のなかの台湾と日本」と題した講演は予定通りに実施されて良かったです。宿題として、「台湾とは国なのか」「今後、どのようにつきあっていけばよいのか」に加え、「もし、日本が国と認められなかったら？」「国旗、国歌をどう思うか？」など4つの課題をグループ討議していただき、高校生の考えを知ることができました。

担当の先生から台湾の学校とのオンライン交流はできないかと相談を受け、台湾の交流先を探して紹介しました。運よく2018年11月台湾から日本修学旅行視察団を神戸にある孫文記念館を案内したご縁で、ふるさと台南にある国立台南第一高級中学校とつながることができました。また、桃園市にある私立治平高級中学校応用日本語学科にも協力を得て、「学校紹介」「自分の町の魅力」「高校生が好きなもの」などのテーマで相互理解を図ることができました。

台湾を学ぶことは日本を知ること。台湾はなぜ親日なのか、東日本大震災の復興に台湾から200億円の義援金が役に立ったこと。また、台湾はコロナの封じ込めに成功し、「Taiwan can help」日本にマスクなどを贈呈などから、お互いに助け合える関係にあることがわかります。「台湾学習」を通じて、日本と台湾に関心を持ち、日本の良さを知り、日本が大好きになる高校生が増えればと期待します。



台南第一高級中學校から届いた英文のメッセージと写真

The Video Synergy between Tainan First Senior High School(TNFSH) and Kaibara senior high school

We are thankful to this international online interaction. Due to the outbreak of the coronavirus in 2020, our pivotal fellow schools couldn't visit our school in presence. As a result, we initiated a new method, video talk, so as to bridge these foreign relationships. It was really glad to meet, have a joyous conversation with you via the internet in this bitter, disease-bothered world. This event drew most students unprecedentedly, six full classes in total. Divided into thirty groups, students filmed thirty microfilms, introduced campus and clubs of TNFSH, recommended tourist sites, cuisines, native culture in Tainan and more, after two months of preparation. During the process, students learned how to photograph, edit as well. In the meantime, we also watched the thirty videos produced by you, knowing your club activities, campus life, Japanese animations, food culture etc. As students think this collaboration is really thought-provoking, discovering more about Japan

thoroughly, we are sincerely looking forward to having more cooperation opportunities in future. We are hoping for your arrival to our school soon.

Best Regards,

Tainan First Senior High School

The group photo of our principal, Liao Cai-Gu, president of TNFSH parents' association, Jhuang, Shun-Fa with his vice president, your principal, teachers the screen and other classmates in the open ceremony.

Students of TNFSH and Kaibara senior high school are having a video interaction in groups.




The Video Synergy between Tainan First Senior High School(TNFSH) and Kaibara senior high school

210 林立翔

Under this severe epidemic, we are really happy to be able to communicate with Kaibara High School through online meetings.

It was also full of fun while preparing the exchange film, and I learned a lot of things I didn't know. It is our honor to be able to exchange and promote Taiwanese culture with Japanese culture.

When communicating online, due to the limitations of the Internet, there is no way to communicate and dialogue smoothly. Even so, we still tried our best to try dialogue, watch videos and discuss issues. During the process, many unexpected issues were also discussed, which was very interesting.

We are very grateful for this opportunity to communicate with students from

Kaibara High School, and hope that everyone will have a better understanding of each other's culture. I also hope that everyone can overcome the epidemic safely.

rigorous pandemic did both of us left a marvelous memory.

Furthermore, during the meeting, it seemed that we didn't have any language barrier but chatted with each other fluently instead. We talked from school life to the international issue. Some of us even still keep in communication with Japanese students until now.



"A bosom friend afar brings a distant land near." Hope our friendship can last for long.

215 Mitch Huang 黃友銘

Greetings to all teachers and students in Kaibara senior high school.

For the starters, all of us appreciate this precious experience of online meeting between Japan and Taiwan's high school.


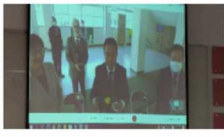





Not only the culture exchange but also the face-to-face interaction during the

218 林柏暘

It's fairly an excellent chance for we us to have this unforgettable experience with you guys. Previously we've viewed the video you have made to introduce Japanese culture like your daily life, your school clubs and animations... etc. We are really looking forward to taking a trip to Japan in the near future!

During the video interaction, although we felt a little embarrassed for our first meeting, we actually learned how to perform a fluent communication with foreigners and how to build rapport with strangers. In conclusion, I enjoyed this activity a lot, for we can thrive under this bilingual condition, understand and embrace cultural differences between others, and even make friends! If we are lucky enough to have the similar chance next year, I'll definitely participate in!

「丹 BAL 台湾」で学んだこと」

2年4組 澤山 滢霞

私達74回生の台湾学習は、講演を聴き、書籍やニュースから情報を集め、レポートを作成し、発表するというものでした。この取り組みのおかげで、この時期だからこそ台湾の姿を見つめることができました。特に台湾政府の新型コロナウイルスに対するスピーディーな対応、台湾の若い人たちの積極的な政治への参加は、日本が目指すべき姿そのものだと思います。

私はリモート交流で柏原高校の行事について発表しました。台湾の学生の方々はとても熱心に発表を聞いてくださり、反応があったときは嬉しかったです。台湾の学生は一人一人が日本語（漢字）のニックネームを持っていたり、英語がペラペラだったりと驚きがいっぱいでした。

例年とは異なる交流方法でしたが、私達なりに最善の方法で台湾の方々とお話ができ、自分の台湾に対する視野を広げられたので「丹 BAL 台湾」に取り組めたのはとても良い経験になりました。

2年2組 豊嶋 心優

初めて話すので、距離感をどうしたらいいのか不安だったが、手を振ると返してくれ、フレンドリーに接するところから始まったので、班員みんなが楽しんでいた。相手に動画の質問をしようしたり、動画を共有しながら説明しようとしてくれたり、とても優しかった。しかし、そこから相手の画面が動かなくなっただけで通信環境が整っているところでした。そこから、チャットでしか話せなくなった。でもチャットでもお互いの趣味などを聞きあうことができた。好きな音楽の話になり、今、日本でも流行しているK-popの話になった。似たようなものが流行していることがわかった。J-popの話になり、AKB48を知っていることもわかった。私たちの周りと同じものが流行していることから、国は違えど同世代だなと感じさせられた。片方が好きなもののお話で、両方が盛り上がることでよかった。来年度以降、このような活動があるなら、通信環境を良くしてほしい。実際にもっと話してみたかった。



To the Students of Tainan First High School
Message from Kaibara High School

2組 36番 山中 陽太 (Yamanaka Youta)

We are really happy to be able to communicate with Tainan First Senior High School online. It was also full of fun while preparing the exchange video, and I learned a lot of things I didn't know. It is our honor to be able to exchange Japanese culture with Taiwanese culture.

When communicating online, I was excited because I had been looking forward to communicating with you. Furthermore, during the meeting, it seemed that we didn't have any language barrier. We also talked about from school life to international issues. I had a good time. Thank you. I hope that everyone can overcome the epidemic safely.



4組 28番 藤井 悠多 (Fujii Yuta)

I really enjoyed the online meeting with you. This online meeting became an unforgettable experience. I saw some video made to introduce Taiwan before. I couldn't go to Taiwan this year, but I would like to travel to Taiwan again in the near future.

During the online meeting, I was embarrassed to talk to people from different countries. It was difficult to speak in English but communicating with them became a very good memory. I want to talk to foreigners actively next time. Thank you very much.



4組 34番 松枝 和 (Matsueda Nodoka)

This activity was a great opportunity for me to learn more about Taiwan. Corona virus has spread all over the world and we were not able to meet in person, the fact that we were connected online was meaningful. I was very happy to learn a lot about Taiwan through chatting after watching the video. I would like to go to Taiwan someday. I hope that the day will come when I can meet Tainan First High School students.



6組 27番 西村萌乃佳 (Nishimura Honoka)

Thank you for communicating with us through online meetings! I'm glad to talk to you and I wanted to visit and see you. When I watched your video, I was surprised at it. I was so excited at your video in which you introduced Taiwanese food, buildings and culture, etc. I've come to go to Taiwan more and more. I'm also happy to make friends with you. If I can go to Taiwan in the near future, let's meet there. I'm looking forward to seeing you!

6組 36番 山口ななこ (Yamaguchi Nanako)

The students of Tainan First High School, thank you for talking with us. We are really happy to be able to communicate with you online. Everyone was smiling when we were talking. When I see that, I was happy. I enjoyed the meeting because that was the first time I talked with foreign students. If I have a chance, I want to visit Taiwan. I had a good time. Thank you.



治平高級中学校から柏原高校生徒へのメッセージ

日本語教員 林美雲

コロナの影響で、台日の高校生交流はキャンセルすることになっていて、とても残念だと思っています。今回、Cisco で交流できて、両校の生徒達に新しい体験だと思いました。生徒達が発表した内容から、貴校の部活や行事や丹波市のことなどがわかって、いい勉強になった交流でした。日本語を通じて、お互いに面白いことを話し合っ、異文化の理解に良い方法だと思いました。早くコロナ禍が終息しますように。一緒に頑張りましょう。

応用日本語学科 2年愛組 簡玳羽

ビデオチャットに参加して本当に楽しかったです。皆さんに故郷の「大溪」を紹介してあげました。機会があったら、ぜひ大溪に遊びに来てください。交流の時、皆さんも私達にたくさん面白いものをシェアしました。私は「僕のヒーローアカデミア」というアニメは見たことがあります。とても好きですよ。将来機会があったら、また皆さんと交流したいです。

応用日本語学科 2年義組 莊凡萱

柏原高校のみんなと交流できて、本当に嬉しかったです。みんなは私達にアニメを紹介してくれて、歌を歌ってくれて、忘れられない交流でした。このような特別な経験を与えてくれて、ありがとうございます。

応用日本語学科 2年愛組 羅郁萱

I am so happy and excited because my classmates and I can chat with you all through the Internet. I can feel that you all are so kind and full of passion. My proficiency in Japanese has a lot to be desired, so I cannot chat with you all fluently. However, it's a good start, and I will spend more time learning Japanese. Hope COVID-19 will come to an end soon, and we can meet each other in person.

応用日本語学科 2年愛組 李詠婕

私は日本語が苦手ですが、日本人の生徒とビデオでコミュニケーションができて、本当に嬉しかったです。将来、もっと話せるようになるように、一生懸命に日本語を勉強し続けるつもりです。今度の交流を楽しみにしています。



5 探究Ⅱ

2年生「探究Ⅱ」(2単位)の授業では、次のような流れでプログラムを再編成した。

- ・1年生で取り組んだ内容を振り返る(テーマ・手法の再確認)
- ・グループ分け
- ・テーマ設定
- ・探究活動(先行研究分析(論文精読)、基礎研究(フィールドワーク))
- ・中間発表会での発表(ポスター発表)
- ・各種発表会への参加
- ・論文作成
- ・本校発表会「地域課題から世界を考える日」での発表



それぞれが設定したテーマについて持ち寄り、大きく分けたグループの中で、何をテーマに設定していくのかを改めて考えさせた。その後、テーマに沿った論文の精読やフィールドワークを行い、研究を深めて成果をまとめ、発表していくようにプログラムを編成している。

時間を要したのがグループ分けとテーマ設定のところである。まず、グループ分けにおいては、1年生の時に取り組んだテーマを精選し、1グループ4～5名、全8グループになるようにした。指導教員8名がそれぞれのグループに付き、取り組んでいく内容について議論を進めた。ここでは、グループ研究を基本としていたが、グループによっては、1つのテーマに絞ることが難しいものもあり、2名での共同研究や個人研究として取り組むグループもでてきた。テーマ設定には特に時間を要した。指導教員が時間をかけて面談を重ね、生徒らの希望を聞きながら、研究の方向性を定めていった。

フィールドワークについても、昨年までのように現地に赴けないなどの制限もあったが、オンライン形式で行うことも可能となった。オンラインでの実施によって、今まで行くこと



のできなかったような遠方の人ともつながることが可能となり、表情を確認しながら双方向の会話をしていくことで、電話取材では伝わりきらなかったような内容を聞き出すことができたようである。

各グループがフィールドワークの面において上記のような工夫を凝らしながら進めてきた探究活動をまとめた論文のタイトルは次のとおりである。

甘酒お屠蘇の開発
新しい授業形態に適した教室の机配置についての提案
オンライン授業は「教える」と「学ぶ」を繋ぐことができるのか

格差をうめろ！～なにかしらできるはずだ～
感染力を活かせ！～健康維持・促進～
フェアトレード商品の購入量を上げるための一方策 -道の駅「おばあちゃんの里」での地域内トレードの好循環を事例として-
脱プラはなぜ困難なのか ～「水わかれ」から考える～
萌えるコミュニティーづくりとストレス軽減を目指すライフスタイルの提案
感染症に対する人々の認識の変化について-旧柏原荘(結核療養所)を事例として-
児童養護施設で生活する高校生への進路支援体制の改善に向けて
障がい者の自己肯定感を促す環境づくり・障がい者能力の自己開発能力についてのエス ノグラフィー研究 -丹波市市島町の『ら・ぱん工房 来古里』とA氏が紡いだ物語-
公立高校進学を実現したニューカマー外国人家庭の要因分析

今年度は、次の発表会に参加した。外部での発表会がオンライン開催となるものが多く、当初は新しい発表の形態について生徒らも戸惑うこともあったが、回数を重ねるにつれ要領よく話せるようになっていった。オンラインとなったことにより、参加校が全国から集まることとなり、生徒らにとっても刺激あるものとなったようである。

リサーチフェスタ 2020 (甲南大学)
全国高校生マイプロジェクトアワード 2020 リフレクションプログラム
全国高校生マイプロジェクトアワード 2020 関西 Summit
Glocal High School Meetings 2021 全国高等学校グローバル探究オンライン発表会
第6回高校生国際シンポジウム(予定)
全国グローバルリーダーズ summit in えびの
SDGs Quest みらい甲子園 第2回関西エリア大会

次頁からは、指導体制について指導いただいている講師(福知山公立大学・杉岡准教授)の方や、一連の探究活動を経験した生徒の感想、指導に当たった職員の声を紹介する。なお、制作したポスターおよび論文の一例は後に生徒作品の頁にて示すこととする。

○外部講師（運営指導委員）

「柏高ならではの探究学習の強み（柏高らしさ）とは何か」

杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）

2019年度より地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）「TAMBA Mirai Project 丹波から TAMBA へ～グローバルな視点で丹波の地域課題解決に主体的に取り組むグローバルリーダーの育成～」の運営指導委員の一人として、兵庫県立柏原高校（以下、柏高）に関わらせて頂いている。柏高



といえば、福知山出身の芦田均元総理が学んだ高校ということで、福知山住民としてもただならぬご縁を感じている。というわけで、せっかくの機会を頂いたので、小稿では、2年間委員として参与観察し、担当教員の先生方とも意見交換させてもらう中で、外部の視点から感じている「柏高ならではの探究学習の強み（柏高らしさ）」について、2点ほど記してみたい。

1点は「テーマ設定のオリジナリティ」である。当然のことながら1年生の「探究Ⅰ」にせよ、2年生の「探究Ⅱ」にせよ、丹波市内の高校で探究学習を展開すれば、自ずと丹波市の資源である「丹波三宝（栗・黒豆・小豆）」「丹波竜」「道の駅」といったテーマが毎年のように出て来る。もちろんこれ自体は「地域から学ぶ」「地域のために学ぶ」という探究学習そのものの狙いでもあり、問題はない。ただ、柏高は良い意味でこの常識を裏切ってくれた。具体的には「スタンディングデスクを用いた授業スタイル改革」「柏原高校をよくする」といった、ある種「内向きなテーマ」が出てきたのである。これは筆者の想定外であった。しかも、このうち前者のチームは米国調査も経験したのち、「高校生国際シンポジウム」のポスター部門教育部門で優良賞を受賞した。また後輩チームにバトンも渡すことにも成功している。後者のチームについては、たまたま筆者が審査委員を務めた「全国高校生マイプロジェクトアワード北近畿選考会」に出場し、最優秀賞を受賞した（地区代表として関西大会にも出場）。なぜここまでの素晴らしい成績を残すことができたのだろうか。それはひとえにテーマに対する当事者性やリアリティ、本気度のレベルがいわゆる一般的なテーマと違ったのであろう。すなわち、ここから導出される示唆とは、1つには「本気の学びを引き出すためには、本気で取り組めるテーマ設定がいかに重要か」ということであり、今一つは「学校も地域の一つであり、探究学習のテーマとなり得る」ということである。この事実は、テーマ設定に悩む多くの高校の今後のヒントになるだろうし、大学で教える筆者にとっても大きな気づきとなった。

2点は「学年横断、組織横断の学びと気づきの仕掛け」である。毎年「探究Ⅰ」「探究Ⅱ」の校内中間発表会に参加させてもらっているのだが、この日は1年生から3年生まで知の探究コースの全生徒が発表する一日となっている。したがって、まず生徒の中で「傍観者＝お客さん」を作らない仕掛けとなっている。これが大きな特徴と言えよう。次にこの日は筆

者や高校の先生方はじめ多くの大人が質問したり、講評・助言をしたりする。このことにより、生徒は「外の目」や「客観的視点」をインプットする良い機会となっている。大げさに言えば「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」という事業名ならではの設計であり、大きな特徴でもあるとも言えよう。そして、極めつけは3年生の存在である。これは今年度からの試みであったが、3年生が「探究Ⅰ」「探究Ⅱ」の経験の総括として、英語で後輩たち向けにプレゼンを行ったのである。このプレゼンにはどよめきが生じるほどのインパクトがあった。すなわち、1、2年生からすれば、「何のために」「誰のために」探究学習をしているのかが見えた瞬間であっただろうし、自分たちの未来、すなわちロールモデルが見えた瞬間でもあったのだろう。まさに「柏高流モンテッソーリ教育」の体現を見た瞬間であり、ここに「柏高ならではの探究学習の強み（柏高らしさ）」を感じた次第である。本事業が終了してもぜひ続けて欲しい。

限られた紙幅の中で言い尽くせないが、以上2点が、筆者が強調したい「柏高ならではの探究学習の強み（柏高らしさ）」である。探究学習に正解や答えがないように、本事業にも正解や答えなどはない。しかし、強みを磨き続けることで、それがいつか「とがり」となり、柏高から「第二の芦田均元総理」のようなグローバルリーダーが輩出されることであろう。そんな人財が今後、丹波市へのUターンはもとより、教師として柏高に戻り、探究学習を教える。そのような日が来ることも今から楽しみである。

○生徒の声

2年1組 小倉 彩音

私たちがフェアトレードという題材で探究を始めたきっかけは「フェアトレード」に対する興味からであった。しかし、探究活動が始まった当初は、私たちが持っている情報がまだまだ不十分であったり、目的や方向性が曖昧であったりした。そのため、私たちが意見や要望を出すことは少なく、先生からの働きかけがなければ方向性が定まらなかった。

しかし、活動が進み、知識が確かなものとなっていくにつれ、その一連の活動に込められた想いを知るようになった。班員全員が当事者であるという意識が強まり、班内での意見交換やテーマについて考える時間も増えていった。特に、フィールドワークを行うことで場の雰囲気を感じ、直接に想いや考えを聞くことは、学校などで情報を集めることに比べて、自分たちの想いを強くするとともに、新しい見方や考え方を与えてくれたように思う。このように、たくさんの人と関わり、様々な思いや課題を共有できる機会をもっと経験していきたいと思う。

2年1組 上田 太紀

兵庫県立柏原高校では、グローバル教育が盛んに行われている。私はその一つである、生徒が各々の課題や調査テーマを設定し、その解決を目指す「探究」授業に取り組んだ。そして、その活動内で私は大きく分けて二つの点で成長したと考えている。

一つ目は、研究での総合的な能力の向上である。探究学習では、論文作成の際のタイピングスキル等の基本的技能からアンケート分析や情報の取捨選択、文章や図をまとめる力等の高度な技能が求められる。教師の方々の丁寧な指導の下、私はこれらの技能を大きく成長させることができた。将来の大学での学習や仕事に役立てたい。

二つ目は、良い人間関係を築くことである。私はこの活動を通して、同じ探究班のメンバーと役割分断し、協力する大切さを学んだ。また、教員の方にも添削や助言の面でたくさんサポートをしていただいた。仲間や周囲の人と協力することは大切だと改めて感じる機会となった。

探究活動で論文を完成させた時の達成感は大きく、とても良い経験になったと思う。このようなグローバルな取り組みが増えることを願う。

○指導教員の声

「探究Ⅱを担当して ～多様な人との出会い、交流～」

松山 典章

コロナの世間への影響があるのと同じく、今年度の探究に関しては非常に多くの活動が制限されることにはなりましたが、多様な人と関わり学びを深めることに関しては Zoom の普及のおかげで、コロナ禍でなくてもなかなか会えないような人の話を聞く機会にも恵まれたというのが率直な感想です。

私の担当する移住、高齢者、無人駅を探究するグループでは夏季休業を利用し、丹波市に対してここ数年積極的な市民参加型のイベントを立ち上げてきた人たちと Zoom ミーティングを行うことで、研究に対する自らの方向性を引き出してもらいました。調べ学習で終了するのか、自分たちでアクションを起こしやってみるかというところで、自分たちにできることをやってみたいということから提案されたのが移住相談窓口での事業です。そこに自分たちが登場し高校生だからこそできる移住相談をやってみて、その人たちの考え方をすることで研究を深めるというものでした。またこの仕事自体が新たな時代を築き上げるスタイルの仕事であり、高校という社会への窓口に差し掛かっている彼らにとって社会を知る良い機会でした。

11月に市役所と社団法人 Be の方たち合同でやっているオンライン移住相談会に生徒たちは参加をしました。自分たちの高校に至るまでの丹波での過ごし方を紹介し、相談者の人たちの質問に回答したりするものでした。また社会人としてのアドバイスをそこでもいただきたりしてまさしく多様な人と関わり学びを深めるということが実践されました。告知の方も新聞社への連絡もしていただいたおかげで、高校生が移住相談窓口で実際に相談者の相談を受けてみるということをやっているというのは地域の人たちにとっても頼もしいと思ってもらえる機会であったと思いますし、またこれまで学校の中で終結していた高校生の教育が社会に目を向け、地域の大人と協働して一つのことをやっていくという新たな学びのスタイルをアピールすることができたと思います。自分たちのやってみたいこと、も

もちろん最初は大人のアドバイスがスタートではあったけれど、どこでどんな人と出会っても、堂々と自分の意見を話し、主体的にそのような機会にかかわることができるようになったと思います。

落ち着いているときには実際に移住者の方と出会い移住のきっかけやこの町に住み始めての感想、田舎だからこそ、または移住してきたからこそ出会えた人との中で、移住者だからこそ語れる丹波市の魅力について聞き、自ら生まれ育った街に誇りを持てる機会となりました。

インターネット社会では学びのツールは人以外にもあふれてはいますが、人の心を動かすのは人の言動行動であることがやはり多いので、今後も探究Ⅱでの出会いを次の出会いのベースにしていってほしいと思います。



「甘酒お屠蘇」を担当して」

石井 理

昨年「探究Ⅰ」で74回生知探コースを受け持ち、引き続き今年度は「探究Ⅱ」を受け持つこととなった。昨年は丹波が抱える人口減少・高齢化等、この授業がなければ見過ごしてしまう地域課題について、現実を己の目で見て問題意識を持ち、発表することである程度共有することができた。そして、今年度の「探究Ⅱ」ではこれらの諸問題について、逆に丹波の魅力をアピールすることで解決策を模索することが目標となった。

私が受け持ったのは、地域の特産品で丹波を盛り上げたい4人。その中の一人が甘酒大好き女子で、絶対甘酒だけは譲れないという。そして、山南出身の男子2名。丹波三宝以外の特産品はないのか。メンバーと話しあううち、甘酒→糶→酒→丹波杜氏→西山酒造、山南の名所→薬草薬寿公園→薬草→漢方薬とつながり、調べてみると、甘酒は巷では「飲む点滴」と称され、近年の健康ブームで大幅に売り上げを伸ばしているとのこと。柏原の薬草栽培は、江戸時代からの歴史がある。薬草と飲み物を考えたとき、正月に飲むお屠蘇を思いついた。お屠蘇は、1年の健康を祈念し、屠蘇散（10種類くらいの乾燥した薬草をティーパックにしたもの）をお酒に漬けたもので、一般に市販されている。これらを組み合わせた「甘酒お屠蘇」は、地域の産業と関係があり、コロナ禍で健康意識が高い今の時期、丹波の特産品になるのではと、方針が決まった。

調べてみると、新潟に「糶お屠蘇」の商品があり、メーカーにダメ元で造り方を聴くと、屠蘇散の抽出エキスを甘酒と混ぜているだけとのこと。丹波にある漢方薬メーカーの栃本天海堂に聴くと、屠蘇散の薬草は薬事法には触れないとのこと。メンバーは商品化に向け、俄然やる気が出てきた。

甘酒娘が自宅で甘酒を造り、アマゾンで注文した屠蘇散を化学実験室でエタノールに浸してエキスを取り出し、試作品1号を造ったが、加熱不足でアルコールが残り失敗（私的に

はとてもおいしかったが)。その後、湯に屠蘇散を浸し、ノンアルコール試作品を造る。甘酒のつぶつぶ感が苦手とのことでミキサーにかけ、薬草の匂いを押さえるためジュースを混ぜるなど、工夫を重ねた。(夏場は、冷えたサイダーを加えると非常においしい。)

西山酒造では「甘酒ヨーグルト」を市販されており、フィールドワークとしてその開発秘話を聞きに行き、2回目には我々の活動を女将さんにプレゼンテーションし、試飲してもらって感想を聞いた。密かに商品化になるかと期待したが現実は厳しく、味はチャイのようでおいしいが、今の段階では商品化は難しいとのこと。糀は会社のものを提供するので、多くの人に試飲してもらい、市場調査をしてはとのアドバイスをもらう。

街角での調査はコロナにより断念したが、年末にはクラス全員と多くの先生方に試飲してもらい、高評価を頂き、生徒は手応えを感じた。

甲南大学リサーチフェスタにズームで参加し、発表も体験できた。全国高校生 MY PROJECT AWARD 2020 への参加も決まった。商品化への道のりは遠いかもしれないが、この探究活動での経験は、これからの生徒の生き方に大きく役立つと思われる。本来は生徒自らが失敗を乗り越えることが必要なのだが、生徒の背中を一押しする教師のこの授業に対する熱意が、生徒の成長を左右するのではと思う。



「健康と教育」を担当して

高野 祥

探究Ⅱでは1年次に続いて個々に探究のテーマを持ち、深めていくことから始まり、テーマの関連があるメンバーが集まって新たにチームを組み研究を進めていく形となった。コロナウイルス感染症の流行により、2か月遅れでの始まりとなったが、休校となっていた期間で感じたこと、考えたことが蓄積されており、研究したいテーマも非常に多方面に渡っていた。中でも、コロナウイルスの流行による学びへの影響に関して実体験から研究のテーマを見出す生徒が多かったように感じた。

私が担当した班では「教育格差」、「より良い学習方法」、「コロナウイルスが健康に及ぼす影響」というテーマを持った5名が集まっていた。それぞれにテーマの異なるメンバーが集まる中、どのように研究が進められていくのか興味深く感じていたが、進めていくうちに他のテーマと合わせる難しさ、どのような方向に舵を切っていくか、新たに必要ない取り組みを考え出すなど、連携を図りつつも自らの研究を進めていくという難しさを経験する生徒たちの姿があった。生徒たちが社会に出た際にも全体の方向を感じ取り、他と力を合わせ、自分に今できることは何かを考えながら取り組みを進めていく力が求められていくと考える。そういった面で探究活動の初期に困難なことと向き合う経験が出来たことは生徒たち

の成長につながったのではないだろうか。この際、コミュニケーションを取った結果、無理に目標を合わせるのではなく、それぞれのテーマを再確認し探究を進めていくことが出来たのが後で振り返ってみて分岐点となったと感じている。

順に、「教育格差」については収入と学力の差は相関関係にあるということに加え、地方と都会でも学力に格差があるという教育格差に着眼し、なぜ格差が生まれるのか、格差を埋めるには何が必要なのか、そして、格差を埋めるために自分たちに出来ることは何かということを探求していった。途中、立命館大学の柏木智子教授に Zoom でインタビューする機会に恵まれ、貧困、格差、日本の課題について話を聞かせていただくことが出来た。なかでも、貧困問題に対し自分たちに出来ること、出来ないことについての話を聞く中で探究すべき内容が絞られていった。

また、「より良い学習方法」については、日々の経験から集中力を長時間持続することの困難さを感じたことに対し、どのような取り組みが出来るのか、そして、より効率的な学習方法を探求することで解決出来ないか感じたことをきっかけに探究活動が始まった。夏季休暇に友人にいくつかの学習パターンを提示、実験を行った結果を元に研究を進めた。

最後に、「コロナウイルスが健康に及ぼす影響」については新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、それが丹波地域の人々の健康に対してどのような影響を与えたのかというテーマから、地域の健康増進について関心を持ち探究活動を進めていった。日本や丹波市の運動・健康状態に関する調査を調べることで課題を見出すことが出来た。現在丹波地域で行われている取り組みや、全国の取り組みを調べていく中でより魅力的な取り組みは出来ないかと生徒自らが考え、提案内容を深めていった。

生徒の探究活動を傍で見ていて感じたのは、「探究」という活動の可能性である。決まりきったことを教えられて終わるのではなく、テーマも、過程も、手法も自由な中で自分の興味のあることについて考えを深めていくことが出来るこの「探究」活動に非常に大きな魅力を感じた。何より、生徒自身が日々手ごたえを感じながら取り組めたことと思う。今後も柏高のより魅力的な学びの場となっていくことを期待したい。



6 総合Ⅲ

例年、「進路実現」をテーマに、だが、学年裁量で展開されていた3学年一般クラスの総合Ⅲ（1単位）について、研究推進部主導で昨年度からカリキュラム（指導内容）の改編、作成を進めていた。しかし、新型コロナ感染拡大予防のための休校措置で授業日数が大幅に削減され、総合Ⅲについても変更を余儀なくされた。



とは言え、先の見えない世の中、「答えのない問題」に対して多角的に考えることを重視する我々研究推進部では、この「新型コロナ禍」を格好の「学習教材」「学習機会」と認識し、4月半ばには新型コロナ関連の新聞記事等を集めた12頁に及ぶオリジナル教材（資料）を学年の生徒全員に配布（郵送）した。

6月から、2週間の分散登校期間を経て通常授業が始まったのであるが、総合Ⅲでは、休校期間中の配布教材（資料）を元に、「新型コロナウイルス」をテーマとした3分間スピーチを行った。各自の希望する進路、興味ある学問分野、溢れる情報、家族など身の回りのことなど、氾濫する情報を精査し、「じぶんごと」として捉え、語ろうとする姿勢が印象的であった。（写真・上）

6月30日には3学年一般クラス（2～6組）を対象に、面接試験に対する指導を行った。面接の作法から始まり、しかし、そこに止まることなく、面接試験の意味と、その準備として各自の進路意識を明確化しておくことの重要性について触れたつもりである。総合の授業の無い知の探究コースにも、特別に時間を取ってもらい、同じようなテーマで授業を行った。（7月2日実施）

さらに、複数名からの要望があったので、7月17日の放課後に同窓会館のホールで小論文講座を開いたところ70名を越える参加者があった。駆け足ではあったが、約90分、概論から、具体的な小論文の書き方にまで触れ、夏季休業以降は進路指導部と学年を中心とした個別指導をスタートした。（国公立大学2次試験に向け、21年1月現在も指導継続中。）

9月7日には、各クラス単位で小論文指導を行った。同じく、小論文試験が課されることの意味合いと、それに対する準備が、各自の興味のある進路・学習分野に対する意識を高めることの非常に有効であるという話を各クラスの担当者からしてもらった。

9月以降の総合Ⅲは、旧来のスタイルで、各担当者（10名）がゼミを開き、少人数で指導するスタイルとなった。例年は教科指導が多くなっていたのではあるが、本年度は、学年に上述の趣旨を汲んでいただき、「数学探究」「哲学的対話」など、探究型・対話型の学習を意識した内容で展開していただいた。面接講座についても、ただ面接作法を指導するだけではなく、立場の異なる人とのコミュニケーションの必要性・留意点や、話の聞き方、建設的な議論の展開の仕方、プレゼンテーションの方法などについても指導していただいたと聞いている。上述、哲学的対話の講座では、20名が車座に座り、毎回、「学びとは」「趣味とは」「人権とは」「生きるとは」といったテーマで話し合いを行った。

授業時間数の不足から、受験学力に対する焦りが生まれ、学校再開の当初は、「教科指導に時間を割きたい」と声があって予定変更を繰り返してきたのではあるが、最終的には、生徒・担当教員双方に少しは探究型の学びの必要性を理解してもらえたように思え、次年度の計画に生かしていきたいと考えている。

「小論文・面接指導で表現力を磨く」

3年6組 渡邊 梨生

1学期の総合では、休校期間中に配られた資料を参考に、新型コロナについてのニュースや新聞記事等を見て思ったことや、各自の進路希望の観点から考えを深めたことなどをまとめ、学校の再開した6月にクラス内で発表（スピーチ）しました。新型コロナというひとつの事柄について、家族や人との絆の重要性を再認識したことや、自粛していない人に対する怒り、あるいは逆に、「自粛警察」と呼ばれる「行き過ぎた正義」に対する疑問、抱えている不安など、発表内容が人それぞれで、良い気付きを得ることができたように思います。医療・教育・経済など、観点や見方によって浮かび上がってくる問題が異なるため、人の発表を聞くことで視野を広く持つことができました。

1学期末、2学期当初には、小論文や面接の講座がありました。私は大学受験で小論文と面接が必要で最初は不安でしたが、それらの講座を受け、また放課後にも先生方からご指導をいただき、しっかりと準備・対策を行うことができました。

10月からはゼミ形式の授業になりました。私は英語長文の講座を選択し、共通テスト対策を兼ねつつ、英語の小論文を書く練習を行い、英語での表現力を磨くことができましたように思います。

他にも哲学的対話など様々な講座があり、みんなそれぞれに充実した時間になったのではないかと思います。



「今後の生活に活かしたい『哲学的対話』での気付き」

3年4組 細見 勇太

哲学的対話の講座は、みんなで丸く円になって座り、例えば「学び」や「人権」や「生」など、普段あまり人とは話すことのないような話題について、相手の意見を聞き、自分の思いについても話す講座です。ただし、発言を強制するものではないというのが、とても良かったと思います。もちろん中には終始話さなかった人もいましたが、でも、他の人が

心の中に秘めていた思いを吐露するのを聞くだけでも、同じ学び舎の仲間の意見だから何かを感じ、考えてくれたのではないかと思っています。人の意見について自分で考え、どれだけ理解を深められるかは人それぞれですが、話をする中で、皆同じような悩みを持ち、打ち明け合い、共有できたことが、私はとても嬉しかったです。

高校時代は、一番自分を見失い、でも、自分について考える時期だと思っています。そんなときだからこそ、同じ年齢の仲間との対話が救いになり、前向きになれる。人とのつながり、関わりは強固なもので、尊ばれるべきことだと思っています。勉学での知識だけが学びだとは私は思いません。



今回改めて感じた対話の大切さを、これからの自分の人生で大事にしたいと思っています。

「3年一般クラス総合Ⅲ、および、「数学探究」について」

藤岡 孝弘（第3学年総合担当）

今年度は新型コロナウイルスによる感染防止対策のため、4月、5月の2か月間全く授業が行われなかった。このため、少しでも学習の遅れを取り戻すべく、10月中旬からは年度当初の計画とは違（たが）え、旧来のスタイルで教科学習を中心としたゼミ形式の授業を展開したのだが、可能な限り探究型・対話的な講座を意識し、生徒選択によって本来のクラスの枠を超えた集団によるものを展開した。

「数学探究」については以下のようなものである。従来のように単に「解き方をマスターする」だけではなく、「問題解決の過程」を重視した解き方を見つけ出すことを重視した。すなわち、以下の4点を取り入れた。

- ① 問題文の中から、事象の数量に着目して数学的な問題を見出す。
- ② 問題解決の構想・見通しを立てる。
- ③ 数・式はもとより、図・表・グラフなどを活用し、一定の手順に従って数学的に処理する。
- ④ 解決過程を振り返り、得られた結果を吟味し、その場面での意味付けを考える。

それぞれの作業については、グループでの話し合いなども意識的に取り入れた。また、題材は、数学的な事象はもちろん、日常生活や社会の事象なども取り扱い、それと既知の定理や知識と関連づけて解くように考えさせるものとした。つまり「なぜそのように解くのか」や「もっと違うアプローチをするとどのようになるのか」というような思考を習慣付けるようにした。そして、問題解決の過程を追う中で「思考力・判断力・表現力」の育成を図った。

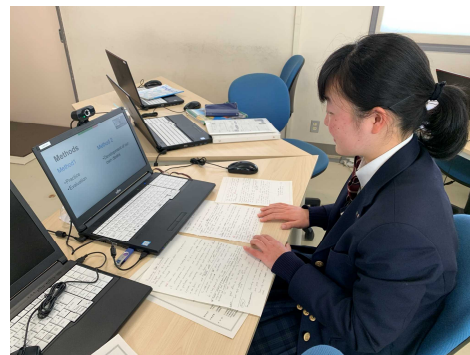
7 学校設定科目「グローバル」

令和 2 年度から、3 年生の総合的な学習の時間を改編し、地域課題研究をより深化させるとともに、プレゼン力の向上を目的とした教科「グローバル」を文系クラス対象に新たに 2 単位設定して開講している。令和 2 年度は英語のプレゼンテーション力をつけることを重点的に行ったが、令和 3 年度より、社会科学系、人文科学系、自然科学系の視点から課題研究をより深化させることができる講座を設置する予定である。

令和 2 年度は一般文系クラス 8 名と知の探究コース（文系）1 名とそれぞれ担当者がついて分かれて授業を行った。一般文系クラスでは①自分の将来についてのスピーチ、②学校紹介動画の作成（2 人ペア）、③コロナが与えた影響についての発表（2 人ペア）をそれぞれ英語で行った。スピーチ、動画の作成にあたっては、ALT の協力も得て海外の方にも見ていただき、zoom でアドバイスをもらいながら作成した。最後の振り返りシートでは、それぞれの生徒が自分のスピーチ力、英語力の向上を感じていた。



ZOOM を用いた発表動画作成（全て英語）

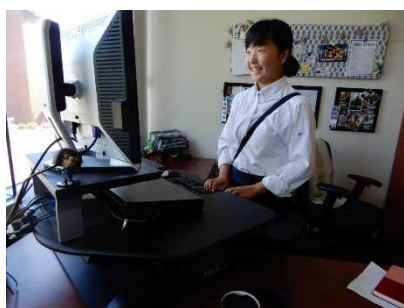


知の探究コース（文系）は 1 人が受講した。この生徒は 2 年次の探究の授業で「スタンディングデスクを活用した授業形式」についてグループで研究しており、3 年次はこれを発展させる形で研究を継続した。新たに実施した研究内容やアンケート調査の内容を踏まえ、昨年度作成した論文の内容を発展して書き加え、それを英訳してまとめた。

研究の集大成として、Glocal High School Meetings2021 全国高等学校グローバル探究オンライン発表会へ参加した。地域との協働による高等学校教育改革推進事業グローバル型の指定校で参加を希望する 37 校が参加して行われる大会であり、事前に内容を全て英語で発表した動画（10 分）を収録してホームページを通して動画を提出した。動画はホームページ上での視聴期間を経て、開発担当教員と参加生徒の投票の結果、銀賞を受賞した。

コロナ禍の中で生徒が一同に集まる外部発表会が中止になる中での、貴重なオンライン発表会の体験となり、自身の英語の活用能力をさらに向上させる良い機会となった。

私が3年生で「グローバル」を選択しようと思ったのは、1、2学年で研究してきた内容をもっと深めたい、続けたいと思ったからです。探究Ⅱでは校内発表だけでなく、校外や県外で発表する機会も多くありました。はじめは発表の仕方が全く分かりませんでした。他校や他校の上手な発表を見学したり、自分たちの研究を進めたりしているうちに、聴いている人に一番伝えたいことを強調することや、データと資料の活用もできるようになりました。3学年では校外で直接発表する機会はありませんでしたが、オンライン発表という形式で、通常よりも多くの人に研究成果を見てもらえることは嬉しいことでした。また、他学年と一緒に活動する中で、先生方から質問やアドバイスをいただくことができ、研究内容を深くしていくことができました。英語で探究内容をまとめるのは、初めは無謀なことに思いましたが、自分がしっかり内容を理解することで、他人にも伝えることができると実感できました。1年間取り組んでよかったと思います。



アメリカ研修旅行



第5回高校生国際シンポジウム（鹿児島）



第2学年での知の探究コース合同発表会



第3学年での探究コース合同発表会

3年5組 友井 さちか

「グローバル」で動画作成に取り組むにあたり、今年できた選択授業ということもあり、前例がないため、どのような動画にすればよいかという戸惑いもありました。しかし、仲間と一からアイデアを出し合い、ALTの先生やいくつかの国の人たちからZoomを通じてアドバイスをもらうことによって、とても満足いく動画を作ることができました。

この「グローバル」ではプレゼンテーションや動画作成をすることが多く、これから大学生、社会人になっても役に立つスキルが養えます。実際に私は、英語でプレゼンテーションをし、相手に伝えようとすることで、英語力も身に付き、自分自身に自信もつきました。来年度以降は、後輩達に私たちの動画からさらにレベルアップした、誰かの役に立つような動画を作ってほしいと思います。こんなにも、海外の方々と面と向かって話せる機会は多くないと思うので、そんな機会を与えてくれる「グローバル」を大切にしてほしいと思います。

3年4組 徳岡 志帆

「グローバル」で学校紹介とコロナ禍の生活についての番組の2回動画制作をしました。普段、動画制作などは全くしたことがなく、しかも英語でとなると難しく、完成できるかどうか不安でした。しかし、ペアで協力しながら、意見を言い合って、どちらもよい動画に仕上げることができ、とても達成感がありました。そして、自然と英語力も上がったと思います。特に、コロナ禍の生活についての番組制作はそれぞれのペアの個性が良く出ていて、最後の活動ということもあり、最初のころと比べてレベルアップした発表ができたと思います。英語の文章は自分たちで考え、ALTの先生に直してもらうのですが、その時は英語で話すので、他の英語の授業を受ける時に、自分の英語の力がアップしたと実感します。来年度以降の望むことは、外国の方とのオンライン交流の時に、電波が悪くて話せなくなることが多かったので、ネット環境を改善してほしいということです。「グローバル」に参加できて本当によかったです。



自分の将来についてスピーチ



オーストラリアの人達に学校紹介



治平高級中学（台湾）とオンライン交流



コロナ禍で変わった生活について番組制作

Glocal 2020

Varuna De Silva (Assistant Language Teacher)

This year, the GLOCAL students were required to create English presentations through a variety of assessment tasks. Initially, they were tasked with formulating a speech script regarding their future plans or an area of personal interest that they would then present before their peers. After spending a few weeks preparing their scripts, where they sometimes sought teacher assistance with specific sentences but otherwise generated their own ideas, the students each gave their five-minute presentation with the aid of their scripts. The students were assessed in terms of the speech duration, their body posture including eye-contact and gesture, and the general fluency and clarity of speech. Afterward, they were given targeted feedback in the form of a written summary of their performance.

Following this task, the next piece of assessment required the students to form pairs and create a short five-minute video about an aspect of the school. Once the groups were formed, they each picked a unique category to focus on, such as school programs, clubs, events, and daily life. Furthermore, they were given special filming permissions to interview their peers and record in-class material as needed. Given the scale of the task, the students took some weeks to plan their video structure, arrange for interviews and specific times to film, and secure any necessary photos and imagery. Unlike the previous assessment, they would not be able to have a script on hand when speaking in English, requiring them to further prepare and work on their fluency for the final take. Having made a rough copy, their videos were shown to the class. Feedback was given regarding the content and presentation, all of which was overwhelmingly positive. A few editing and subtitling mistakes were pointed out, which the students then remedied for the final production. The future goal of these videos is to provide foreign visitors an easy to follow English introduction and description of the school.

Having completed this assessment, the students were handed their final task; to create a live skit on a set topic, which in this case was how their lives had changed due to the coronavirus situation. They were given ample freedom regarding the format, be it a radio or talk show, news report, or comedy act. After spending a couple of weeks preparing any props and visual aids and practicing their delivery, the students performed the skits live in front of their peers. In the following session, edited recordings of their skits were played and each group was given feedback regarding the strong points and areas for improvement from both teachers and peers.

Throughout the term, the students had been participating in Zoom-based discussions with native English speakers from Australia and the USA. Initially, the students began with introductions and light conversation. Later on, four computer stations were setup where they took in turns to describe their video ideas to the foreign participants. This was followed up with a feedback session where the foreign participants viewed their videos and prepared some talking points, asking questions and giving their impressions. Finally, the students had the opportunity for free discussion, covering relevant topics such as university life and the corona virus situation overseas.



8 オンライン交流

「海外研修に代えて」

昨年度は、2 学年での台湾修学旅行、休業中のアメリカ、韓国、カンボジアでの短期研修旅行を行い、今年度も同様の研修を計画していた。新型コロナウイルスの影響を受け、短期研修は早々に中止を決定し、台湾の修学旅行についても取りやめざるを得なくなった。

そこで、海外研修に代わる手段として、自宅学習期間に利用した Zoom などを用いたオンライン交流を採用することにした。学校設定科目「グローバル」では、自宅学習期間に ALT、前留学生とのミーティングを行った。受講生には好評で、学校再開後もオンライン交流を持つことにした。まずは、「自分の将来についてのスピーチ」を前に、自分が就きたい職業や将来の夢について、前 ALT のカラ先生、前留学生のネアリー、レイチェルを前に話した。次に学校紹介ビデオを英語で作成し、アメリカの高校生（ネアリーの友人）、現 ALT ヴァルナ先生の友人（オーストラリア在住）、台湾の高校生に視聴してもらった後、質問、感想、アドバイスを受けた。初対面の人たちと英語だけでやりとりすることを重ねる中で、コミュニケーション力にも自信がついてきたように見える。

2 学年の「丹 BAL 台湾」では、修学旅行に行けないことでモチベーションの維持が懸念されていた。本を読んだり、講演を聴いたりするだけでは、興味を持たないかもしれないということもあり、生徒同士の交流会をオンラインで実施することにした。幸い、台湾学習を支援していただいている後藤みなみさんの紹介で、治平高級中学、台南第一高級中学との交流が実現した。治平は日本語を話せる生徒が多く、最初の交流先としては最適だった。各クラスから代表生徒 2 人が、学校行事、音楽、部活動、漫画・アニメ、日本食を紹介した。治平からは大湫という町の観光地の紹介や学校について、日本語・英語で紹介があった。この後も、継続して交流することを希望されたので、週に一度 Cisco の Webex ボードを活用して昼休みに生徒同士が自由に話せる機会を設けている。

続いて行った台南第一高級中学との交流では、英語による交流を目標にした。まず、学校や日本文化を紹介する動画を英語で作成し、YouTube に限定公開した上でお互いに視聴し、それについて話し合うという形をとった。先方の保護者会から交流先の日本の高校にマスク 2000 枚が贈られるというセレモニーで始まり、本校はグループに 1 台の端末、台南第一は一人一人がスマートフォンを持って交流した。対面での交流が一番であることに変わりはないが、今できることとしてこの交流が実施できたことは有意義であったと信じている。



3年6組 大垣 聖花

私がこのグローバルで一番印象に残っていることは、英語で柏原高校の紹介動画を作ったことです。その活動では、動画を撮り編集、英語に訳したことで英語の能力が高まりました。それだけでなく、初対面の海外の方とリモート対談をし、柏原高校のことを紹介して、質問やアドバイスをいただきました。海外の方とメモも原稿もなく会話をし、発表するのは難しかったし、あまり上手には出来ませんでした。とても充実していて自分のためになるものでした。そこで得たアドバイスや、気付いた日本と海外の違いを取り入れて、よりよい動画になるように努力しました。この活動は4つのグループに分かれて行いました。それぞれのグループがとてもクオリティの高い動画を作ることが出来、それを観るのが楽しかったです。この他にも、自分の夢について発表したり、コロナについてニュース番組風に発表したり、どれも印象に残るものばかりでした。来年度は、今年、時間が足りなくてできなかったプレゼンテーションを取り入れてよりよいものにしてください。

3年4組 中澤 咲稀

今回、グローバルでのオンライン交流を通して、とても貴重な経験ができたと感じています。普段、自分から行動しないと関わることができないような、全く関わりのないネイティブの方々と話すことができたので、自分の英語リスニング力、スピーキング力がどれくらいあるのか把握することができました。また、外国の高校や生活について、教科書や資料で勉強するのではなく、細かいことまで自分が気になったことを直接質問することができたので、異文化交流にもなり楽しかったです。英語表現やコミュニケーション英語のような授業にはない実践形式の活動が多いので、自分で考える力や、自分の考えを他人に伝えるためのコミュニケーション能力の向上につながり、より有意義に感じました。来年度以降も、このような活動を引き続き行うことで、後輩達の英語能力、英語に対する意識向上につながると思います。1年間ありがとうございました。



「母校の探究活動のこれからについて ～国際交流の観点から～」

パンニャサストラ大学バツタンバン 松岡 秀司
(海外交流アドバイザー)

2019年に柏原高等学校(以下、柏高)の海外交流アドバイザーの話を聞いた時、母校でもある柏高の後輩たちに国際交流の機会を少しでも多く提供できればと思い、任を引き受ける事に。就任後は、早速私の所属しているパンニャサストラ大学バツタンバン(PUC-BB)に附属しているパンニャサストラ・インターナショナルスクール・バツタンバン(PSIS-BB)のマネジメントと来日し、同年8月に既にカンボジアで国際交流をしていた柏高生と再会を果たす。そして、2020年3月末を目標に柏高とPSIS-BBの高等部との国際交流の実現の為に、柏高との交流期間の滞在先の確保、交流内容の検討、そして両校間の取り決めの曖昧さ回避の為、協定書の締結に向けての会議等を実施。(2020年12月に締結完了)

しかし、コロナの影響もあり、状況が落ち着くまで無期限の延期という対応がとられる事に。同時に、両校においてもコロナ対策が最優先事項となった為、一旦休止という体を取る事となった。

2020年8月には、第1回目の運営指導委員会がZoomを使って実施されたので、私もカンボジアから出席。その際、いくつか提案。主なものは以下の2点。

- ・柏高で取り組むべき長期的な課題を決める。(単発的でなく、継続的な内容がベスト)
- ・課題に取り組む過程を動画で撮り記録し、校内外に向けて広く情報発信して共有。

課題については、既に指定校認定を受けている内容、もしくは新たな課題。

情報の発信方法については、既にInstagramでの投稿がされている事を知っていたので、別の可能性としてYouTubeでの発信を提案。

理由としては、SNSの発展により、若い世代を中心に活字よりも動画で情報を得ようとする傾向がある事。他にも情報発信ができる媒体があるが、継続性とユーザーインターフェイスの点を考慮すると、有料であるよりも無料で、且つ使いやすい媒体である事が必要。今回、「地域との協働」という点も外せない為、柏高内で完結ではなく、よりユーザー数が多い媒体を選ぶのが効果的と考えた。

既述の会議でも提案させてもらったが、「地域との協働」という観点から、高校を軸に発信できるコンテンツの創造。その後、種類を増やしていく事。例えば、教育分野のコンテンツで発信という正攻法。教育に関しては、日本国内だけではなく、国外に向けても発信が可能であり、「学び直し」を求める社会人や大学生もいる事からも有効と考えられる。ここ最近、日本の大学関係者、特に理系の教職員から聞く話が、数学や化学、物理の基礎が不十分なまま進学してくるので、「補習」としての授業を行う必要があり、学部としての講義が実施できない傾向が強いという事。

そう言った点からも、理系はじめ文系の学び直しを促せる内容の動画を配信するのも、進

学校という立ち位置からも有効であり、地域とそれを越えた範囲での貢献にもなると考える。ここに英語字幕をつける事で、日本国内だけではなく、国外に向けても情報を共有する事が可能になる。(キャプション機能もあるが、当事業に関しては「学び」も重要なので字幕を付ける事に意味がある)

他にも、柏高で定期的に取り組んでいる活動を、字幕をつけた動画で発信する事で、国際交流の導入としても動画が活用できる。また、行政や地域の企業との協議や活動についても動画で紹介していく事も有効と考える。会議内では言えなかったが、動画の時間についても注意が必要。「紹介」する観点に立てば、3～5分以内。可能であれば通常授業の中に情報処理の時間があれば、動画編集について学ぶ様にすれば、カリキュラムに沿いながらも教師側の負担を増やす事なく、新たな取り組みにも移行できると考える。加えて、既述の動画時間であれば、生徒が字幕を入れる事も大きな負担にはならないと考える。(この場合は、英語教師陣による英文の確認作業が必要となる為、その意味で負担は増える恐れもある)

これからも、海外での教師としての視点を共有し、母校の後輩たちの国際交流がより良い内容になるように先生方はじめ委員の皆様と共に取り組みたい。

